

『三国史記』記載の百済地名より見た古代百済語の考察

著者	馬淵 和夫
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	3
ページ	73-127
発行年	1979-03
その他のタイトル	On the Ancient Language of Kudara as Reflected in Kudara Place Names in the Sangokushiki
URL	http://hdl.handle.net/2241/13521

『三国史記』記載の百濟地名より見た 古代百濟語の考察

古代朝鮮語研究会代表 馬 淵 和 夫
洪 思 満
李 寅 泳
大 橋 康 子

は し が き

古代日本語の研究には、諸種の観点から、古代朝鮮語およびその表記の研究が欠くことのできないものであることは言うまでもない。特に私がこの点に注目したのは、文字表記の問題からであったが、やがて漢字を媒介とした音韻、ことにその音韻組織について興味を持った。最初『日本書紀』中に残されている古代朝鮮の人名、地名の用字を通して、古代朝鮮三国の音韻組織についての試論をものしたのは、1962年のことであったが、のち、これを改稿して、フランスの日本学の礎石を築かれた Charles Haguenauer 先生の八十の賀の論文集(未刊)に入れさせていただいた。この方向を推し進めれば、当然古代朝鮮語を残している『三国史記』『三国遺事』の地名、人名に及ぶべきものであった。しかしここで私はどうしても乗り越えられない暗礁にぶつかった。それは、朝鮮語史やアルタイ言語学についてまったく無知であったことである。こうしてしばらくこの研究は到底私の手には負えないものとして放置せざるを得なかった。ところが昨年より、筑波大学に日韓両国語の比較研究を志す若い韓国の言語学者、洪助教授・李大学院生の留学があり、これを機にかねらの援助を得て再び以前のテーマを復活させてみようという気になった。加えて、大学院生でこの方面の研究に志した大橋さんの参加もあり、「古代朝鮮語研究会」を作り、週に1回ずつ研究会を開いてきた。その結果は本論文第二章の「各個地名の考証」に含まれている。この間に李氏は、在来「高句麗語」の資料とされている部分も「百濟語」であった可能性が強いのではないかと言い出し、その論の要

点をまとめたのが、第一章の資料論である。もしこの論が認められるとすれば、従来、高句麗語と日本語との親近性が云々され、それが百済を飛び越して、高句麗と日本との人種的な近しさにまで発展していた学説に待ったをかけることになる。私も過去そういう考えを持っていた(1973)が、これは訂正せざるを得なくなり、古代日本語と最も密接な関係を持っていたのは、やはり百済語であったという、いかにも妥当な結論に落ち付きそうである。この点について、本稿では、そこまでは論証できなかったが、研究は目下進行中で、来年度には発表できることになろう。

大橋さんには論文目録を作成していただいたが、まだまだ落ちがありそうであり、今後の補訂を要しよう。

ともかく、不十分ながら、われわれの研究会の最初の成果をまとめてみたのが本稿である。江湖の御批判をお待ちしている。

(馬淵和夫)

第一章 資 料 論

『三国史記』卷三十四地理志首文に

本国界内	三州	尚州	良州	康州
故百済国内	三州	熊州	全州	武州
故高句麗南界	三州	漢州	朔州	溟州

として、合わせて九州を各国旧地に割り当てられたことが記されている。しかし、三州宛を各国旧地だとする点はかならずしも真を伝えているとはいえない。現に溟州は早くから新羅の領有に帰し、漢州もその南半が高句麗の領域に入ったのは短期間にすぎない。こまかく見れば、時期によって各州が新羅・百済・高句麗および加耶諸国の争奪地であったといえる。以下、新羅による九州の設置を順に追っていきながら、九州が置かれる前の三国および加耶諸国の領域をかいまみることにする。

溟州：新羅紀智證王六年(505)条に悉直州(三陟)を置き、異斯夫をその軍主とし、十三年には異斯夫は何瑟羅(江陵)軍主となっている。これは智證王の頃に新羅は太白山脈以東の日本海岸、すなわち今日の江原道方面に進出したことを示し、早く悉直、何瑟羅方面(後の溟州)を領有したことを意味する。しかし、それより以前、高句麗紀長壽王五十六年(468)に「攻取新羅悉直州城」という記載があって、あるいはもっと早い時期にこの地は新羅の勢力範囲にあった可

能性もある。そうしないと、長壽王の時、新羅の悉直州城を取ったというのは年代的に合わない。そこで、後の溟州の地は、一時高句麗に奪われた期間はあるものの、新羅の領域とみるべきであろう。なお、この地が新羅の領域になる前までは、魏志濊伝に「濊、南與辰韓、北與高句麗 沃沮接」という記録から濊貊の旧地であったと思われる。

尚州：三国史記地理志、尚卅条に「沾解王時取沙伐国為州、法興王十一年年初置軍主、為上州」とあり、洛東江上流の地が新羅の領有に入ったのは法興王(514～540)以前のことであることは確かである。尚州が新羅領域に入るまで昔の辰韓の諸小国であったかどうか疑わしいが、少なくとも「古寧郡本古寧加耶」とあるのをみると、任那加耶・大加耶・小加耶・阿那加耶と共に、洛東江沿岸の諸小国が、何れも加耶とよばれたことを知ることができる。

良州：「良州」の地域は全体からみて、早く新羅領であったものと、比較的早く編入されたものが多く、比子伐(昌寧)・密城(密陽)・達句火(大邱)等の洛東左岸の要地は、五世紀末まで独立した小国であったらしい。特に三国史記地理志火王郡条に、「眞興王十六年置州、名下州、二十六年州廢とあるのは眞興王(540～576)時、洛東江下流の要地を占領して任那諸国を制したことを意味する。眞興王はつづいてその二十三年(562)に大耶、すなわち、大加耶を奪い、その結果、洛東江右岸の沃野が新羅の新領土に編入された」とみられる。

康州：居昌の地に居列州又は居陁州を置いたのは文武王五年(665)頃から本紀に見える。なお、康州領内の郡県はことごとく加羅諸国のもので、新羅によって占領されたものである。以上尚・良・康三州の約半分は旧加羅諸国であるが、新羅本土と加羅諸国との元来の境地は明らかでない。

漢州：眞興王紀十四年(553)七月条に「取百濟東北鄙、置新州、以阿飡武力為軍主」とあり、職官志六停条には「漢山停、本新州停、眞興王二十九年罷新州停」とある。しかし、地理志漢州条には「本高句麗漢山郡、新羅取之、景德王改為漢州」というだけである。ここで、眞興王十四年に新州を置いたというのは、洛東江流域の上州・下州と相応するものであるが、十六年、王自ら北漢山に巡幸拓定のことがあって本紀の十八年条に「廢新州、置北漢山州」とあるのは新州を南漢から北漢に移したと理解すべきであろう。したがって新羅が漢江流域まで進出するようになったのは眞興王の時である。なお、漢州が眞興王によって編入される前のことは、百濟の王都であったこともあって詳細なことがわかるが、三国史記地理志(卷37)に、

「按古典記、東明王第三子溫祚、以前漢鴻三年癸卯自卒本扶餘至慰禮城、

立都稱王、歷三百八十九年、至十三世近肖古王、取高句麗南平壤、都漢城、歷一百五年至、二十二世文周王、移都熊川」

とあって、文周王時(475)に都を熊川に移すまで、漢州の地は本来百済の中心部であった。王都を移さなければならなかった当時の状況については、高句麗および百済本紀に、

長壽王六十三年(475)九月；王師兵三萬侵百済、陷王所都漢城、殺其王扶餘慶(蓋鹵王)

文周王六年(475)十月；移都於熊津

といった記録から察せられる。それ以後、漢州は高句麗の領域にあって、新羅の眞興王十四年(553)に新州が置かれるまで続く。ただし、漢州の北部は高句麗の滅亡後に唐の安東都護府が設置されたところでもあって、新羅の領域に入るのはいくぶんおくれで聖徳王以後のことである。

朔州：眞興王十七年条に「置比列忽州、以阿湊成宗為軍主」とあって、眞興王の時に新羅の州に編入される。この地域は漢江上流の山地帯で百済および濊貊の旧地と思われる。

熊州・武州・全州：新羅が完全に百済をその領有にした後、百済の旧領内に完山州(全州)、熊川州(熊州)、武珍州(武州)を置いたのは神文王六年またはそれ以前である。この地域は今日の湖南・湖西で百済の旧領の大半であるが、ただ武州(光州)地域まで馬韓であったか、また最初から百済の領内かは疑問である。

地理志「高句麗地名」への疑問

上記のごとく地理志記載高句麗地名の漢・朔・溟三州の沿革からこの地名を高句麗語資料としてあつかうには少なからざる疑問がある。朔・溟両州については、三国共に辺境にあたることもあって詳細なことは解らないが、漢州が高句麗領有にあったのは七十八年にすぎない。漢州が高句麗の領域に入った期間が短いというのは、それだけ地理志の高句麗地名がそれ以前の先住民の言語である蓋然性が大きくなるものと思われる。よくいわれるように地名というのは元来保守的な側面を持っている。特に、韓国の古地名についての考証の結果をみると、古代三国の地名が今日まで引き続いて使われている例は決してまれなことではない。新羅による三国統一後、三国古来の地名は唐風の郡県制をまねて漢語式にかえられたものの、それはその地の住民とは無縁のものであったと考えられる。特に注目されるのは、地理志の高句麗地名が、百済の王都が漢州

にあった時代の記録にもでて来るということである。地理志に

漢山州一買召忽県(一云彌鄒忽) (卷 37 地理 4)

郡城県本高句麗買召忽県 景德王改名 今仁川(一云慶原。買召、一作彌鄒)
〈卷 35 地理 2〉

とあって、高句麗地名にみえる「彌鄒忽」は下に引用するごとく百濟始祖溫祚王条に記録された地名と同一地名である。百濟始祖溫祚王条の記録は、百濟の建国伝説とされている部分でもあるが、彌鄒忽の記録は二ヶ所にある。

「沸流不聽、分其民、歸彌鄒忽 以居之、...沸流以彌鄒土濕水鹹 不得安民」

とあって建国の意気に燃えて南行した沸流、溫祚の兄弟のうち、沸流がたどりついたところである。

また、地理志と百濟本紀に記録された両「彌鄒忽」が同一場所であるということは、地理志の沿革と百濟本紀の記録からも明らかである。地理志に「彌鄒忽」の高麗時の改名として「仁川」とあるが、これは今日まで使われている地名であり、漢江下流に位置する。また百濟本紀に沸流が「彌鄒忽」に着くまえに、漢山に至って(「遂至漢山」)、居る可き地を望んだ(「望可居之地」)という記録は「彌鄒忽」が漢江流域にあったことを示していると思われる。してみると、地理志と百濟本紀記載の両「彌鄒忽」は同一場所の同一地名とみるべきであるが、これは単に「彌鄒忽」に限らず、「高句麗地名」をもっと早い時代までさかのぼらせられることを暗示するものとみるべき好例と思われる。

(李 寅 泳)

第二章 各個地名の考証

阿次山>壓海>壓海

「阿次」と「壓」との対応を予想してみる。都守熙(1976; 62, 68)は「壓」がもし厭の誤記、もしくは意味の上で相通じているならと前提して、「阿次」は「壓」の訓にあたるとみている。中世朝鮮語に「厭」の訓として現われる「'ach'yə 아쳐」は、「阿次」とその音相が似ており、また新羅では次のように「厭」を「*ich」と訓んだ記録がある。

或作異次 或云伊處 方音之別也 譯云厭也 〈三国遺事卷3〉

すると、改名は原名の意をとったことになるが、梁柱東(1965; 105, 106)は意

味の上では、両者を結びつけず(すなわち、改名は原名の音をとったとみている)、別の解釈を示している。すなわち、

閼智、郎郷言小兒之稱也。 〈三国遺事卷一金閼智〉

十五年春正月、置小京於阿尸村 〈三国史記卷四、智證麻立千〉

のような用例から、地名、山名において「阿次・峨嵯・阿尸」はみな「小」の意として用いられたとみている。

一方、「阿次」と「壓」との対応を類似音の関係としてみる見解がある(梁柱東(1965; 676)、俞昌均(1961; 32))。この場合、「次」と「壓」の韻尾 [-p] との対応は、音韻論的な問題になると考えられるが、俞昌均は密閉音 [-k] [-t] [-p] から [-p] への発達が、当時完成されていなかった段階とみて、「次」は単に声門閉鎖の作用しかしていないという解釈を示している。

雨述>比豊>懷徳

原名「雨」を訓読した場合、改名「比」と対応される。

雨日 霏微 〈雞林遺事〉

雨 / 必 〈朝鮮館訳語〉

前間恭作(1974; 310)は、「雨」を pi (ㅍ이、雨)と訓読して「比」に通わせる、金沢庄三郎の説に従ってよいといっており、都守熙(1976; 47)も「雨述」の現地名を中心として「pusari 푸사리」、「porimi 포리미」、「pətinai 버드내」など「p-」を保有している地名が多く見られるということから推定して百濟語 *pi(雨)が予想されると論じた。

しかし、辛兌鉉(1958; 78)によれば、「雨」は「pyəc^h」(叟、陽)の訓借であろうとして、「雨述」は「pyəc^hsuri」(叟牟司、陽峯)の意であると推定した。ここで「述」と「峯」が対応されるのは、次のような例証から推定されている。

sunirk (牟言、嶺) 中世朝鮮語

陰峯県 本百濟 牙述県 (三国史記卷36地理3)

峯城県 本高句麗 述爾忽 (三国史記卷35地理2)

なお、原名「述」が改名「豊」にかえられるのは、「豊」が「醴」の古字略字とみた場合、その訓「sur」は「述」と対応すると論じたのがある(梁柱東 1965; 321)。

雨坪>高沢>長水

雨は改名「高」にかわったところから、「uh (우하 上)」の音借であろうと推定した(辛兌鉉 1958; 89)。

都守熙(1976; 50)は「干召渚」紆州から百濟語の単語 *uc(上)を再構して意味面において「*u=高(上)」が成立する例として「上老>長老」をあげている。現代語においてもいわゆる長者は 'us-'arin (웃어른)であり、アルタイ系諸語とは蒙古語 ögede(上に)、ツングース語 ugile(上に)、ゴルティ語 uje(上)、日本語 uhe 等の一致を見せている(李基文 1961; 33, Ramstedt 1949; 284~285, 村山七郎 1976; 41~43)。

猿山>海邑>麗水

「猿」はその訓が「nap」(납)であるが、「海」にかえられたことから「nais」(川)の訓借であろう(辛兌鉉 1958; 94, 97)。つまり、徒山→猿山(海島也)(三国史記卷36地理3)とあるのは、その証であるが、この場合「徒」、「猿」の訓はそれぞれ「nai」(내)、「nap」(납)となり、「nais」(내, 川)の訓借と考えられる。したがって、「猿山」の意味は「川山」で、海水に囲まれている島を示しているとみているようである。

ここで、梁柱東(1965; 676)は、促音「nais」と「nap」の互転は「阿次[as]」と「壓[ap]」の例と同じく可能であろうと論じた。

一方、小倉進平(1975; 330)は原名において「猿」を鹿児島ないし琉球方言に存する「ヨモ」と訓んだ場合、高麗時の地名「麗水」と遠い関係があるのではないかという推定をした。すなわち、「麗」は「yə」(原音 ryə)で、「ヨ」にあたり、「水」は「mu」または「mo」(原訓 mur)で、「モ」にあたるとみるのである。

悦己一云 $\left\{ \begin{array}{l} \text{豆事城} \\ \text{豆陵尹} \\ \text{尹城} \end{array} \right\} > \text{悦城} > \text{定山}$

「己」が「城」に改名されたところから、百濟語の「ki」(城)が再構できるとされている。実際、百濟地名には同様の対応が抽出されるし、古代日本語の「ki」(城、柵)は百濟語からの借用と考えられている(李基文 1961; 38 馬淵和夫 1973; 569)。

儒城県本百済奴斯只県 〈三国史記卷 36 地理 3〉

溟城本百済紀己郡 く " 〉

基郡本百済富城郡 く " 〉

ただし、上記例のうち、「奴斯只」の「只」は「キ」の甲類にあたるので、当時「キ」の二類の区別がなかったろうと前提しなければならない。なお、「基」については、若干想定できるが、確証はない。

皆火>扶寧>扶寧

「皆」は下記のような記録から音借とみられる。

皆火 或称 戒発県 西有界火島 〈大東輿地図〉

介山郡 本高句麗 皆次山郡 〈三国史記卷 35 地理 2〉

李基文(1975; 44)は、高句麗地名において

「王逢県 一云 皆伯」〈三国史記卷 37 地理 4〉

「王岐県 一云 皆次」く " 〉

ような例から、「*kai (皆)」は王の意味にあたるとみて、夫餘官名の *ka (加)、蒙古語の qaran, qan または新羅語官名の「翰、干」等と一致しているといった。

一方、改名「扶」は『周書』(異域伝百済条)に「王姓夫餘氏」とあって、百済王の姓氏が夫餘氏であることがわかるのであるが、これは原名「皆」と対応しているとみられる。

加知奈一云加乙乃一云薪浦>市津>市津

「加知奈」と「薪浦」との対応から「奈」と「浦」は改名「津」と結びつけられそうで、「加知」と「薪」の対応が考えられる。都守熙(1976; 40)は「薪」の古訓を「*kəti」と想定して、中世朝鮮語の「kaci」(가지, 枝)は「*kəti」の口蓋音化の結果と推定した。

また「加乙」においては、中世語において分派の意味をもっている「kar」(가, 派)につながる可能性があるとして、「加知」(枝)と「加乙」(派)は意味的に相通していると論じた。

しかし、「加知」と「加乙」の対応から「知」、「乙」がともに [t] > [r] で実現されたとすれば(俞昌均 1961; 22)、中世語「kaci」(枝)と関係づけられるのはむずかしくなると考えられる。

一方、「奈、乃」は「浦、津」と対応しているとみられる。

素那 或云 金川、沈那 或 煌川(三国史記 卷47)

津 nara (ㄴ ㅅ) (訓蒙字会上、五)

熊津 久麻那利(怒利) <日本書紀 卷九仲哀天皇九年>

甘買-云林川>馴雉>豊歳

「買」と「川」との対応については、高句麗地名からよく知られているが(李基文 1961; 33, 村山七郎 1962 b: 70, 馬淵和夫 1973; 560)、百濟地名で「買」(川)がみえるのは夫餘系の流入とされている(都守熙 1976; 45)。

百濟地名において、「買」は三つある。

喜安県本百濟欣良買県 (三国史記卷 36 地理 3)

瞻耽県本百濟買仇里県 (")

買仇里、海島也 (三国史記卷 37 地理 4)

「欣良買」はてがかりがなく、「買仇里」の「買」は語頭にあつて、高句麗地名とはその造語が相違している(「買仇里」の項参照)。改名「馴」はその字源からして、「買」と関係づけられそうである。なお、「甘」は地理志卷三十七においては、「其」とあるが、「甘」のあやまりとされている。

牙述>陰峯>牙州

原名「牙述」と改名「陰峯」は、それぞれ対応しているとみられる。まず、「牙」はその訓が「*əmni (ㅅ ㅅ, 牙)」ということで、「陰」はその音にあたるとしている。(金沢庄三郎)。

牙 *əm ㅅ (訓蒙字会 上 13)

牙樟 *əm-noro ㅅ 노로 (訳語類解 下 33)

陰 iəm (上古音) (董同龢、「上古音韻表稿」)

ここで、百濟語の「*əm」(牙)が推定できるのであるが、梁柱東(1965; 9)は単に「牙」の意とみないで、窮極的語源は「kam」(ㄱ)につながると同時に女神を意味する語として解釈した。

一方、「峯」は、中世朝鮮語「sunirk」(今旨、嶺)を思い出させるのであるが、実際、地名の記録からも「峯」と「述」の対応は推定される。

峯城県 本高句麗 述爾県(三国史記卷 35 地理 2)

比豊郡 本百濟 雨述郡(三国史記卷 36 地理 3)(ただし、この場合は豊を醴の略とみて訓読した時、梁柱東 1965; 321)。

季川>季水>長沢

「季」は「長」に改名されたところから、一般に中世朝鮮語、「kin、진、長」にあたとみられている。実際、地名の用例からも察せられる。

長 kin tyang (진양)

(類合下 48)

永同県本新羅吉同県

(三国史記卷 34 地理 1)

今勿>今武>徳豊

「今勿」は改名「今武」と同じく「k'in-mur」(은물、大水)の音借と推定した(辛兌鉉 1958; 76)。

実際、「勿」において新羅地名、史勿>泗勿県(三国史記卷 34)、および高句麗地名、徳勿>徳水(三国史記卷 35)などのような例は、中世朝鮮語「mir (물、水)」を思い出させる。

また、都守熙 (1976; 46) も同じ見解を示しているが、一方では下記のような例から“黒＝陰＝今勿”の可能性のあることを指摘した。

黒壤郡本高句麗今勿奴郡(三国史記卷 35 地理 2)

禦侮県本新羅今勿云陰達(三国史記卷 34 地理 1)

しかし、「今」は高麗時「徳」(訓 k'in 訓蒙字会)にかえられたのと、現地名「徳山」の近くには「大川」があることから大きな水(川)の意として考えられる(辛兌鉉 1958; 76)。

仇知>金池>全義

同じく『三国史記』地理志(卷 36 地理 3)には、「金溝県 本百済 仇知山県」のような地名もあって、原名「仇知」と、改名「金」とが対応され则认为られる。

都守熙 (1975; 163~173) は中期朝鮮語の文献に散在し、現在語においても、その語形を維持している「kuri」(구리、銅)は、百済語「*kuti」(仇知)の音韻変化の結果とみて、百済時代には、まだ「銅」と同様「金」も「*kuti」と通称していたと推定した。特に Altai 系語にみられる (Ramstedt 1949)

kuri G 97. 'copper, brass, cast iron', Mo. küler, kürel 'bronze' > Tung. kuler'ore', kulermę 'metallic',

のような単語は注目をひくとして日本語の「アカ-ガネ銅」も対応すると論じた。しかし、日本語においては古代日本語にみえる「ク-ガネ黄金」の方が

適切な例であろう。(馬淵和夫)

一方、李崇寧(1971)は中世朝鮮語に「金」の訓がみられないことから、「仇知」が「金」の語源であるかにわかに断定できないとして、中世語の「kut、そ、堅」と結びつけて蒙古語の「ködür 堅固、厚」につながる可能性を示唆した。

しかし、俞昌均(1960a; 21)は「仇知」と「金池」の関係を“仇知—金池、仇/金 尤(jo)/侵(jo)”のように「仇」と「金」を対応させて同一音を表記した音借とみている。

完山—云 $\begin{cases} \text{比斯伐} \\ \text{比自火} \end{cases} > \text{全州} > \text{完山}$

「完山」が一方では、「—云比斯伐、—云比自火」(巻37)といわれるのは誤まりとされている(藤田亮策 1953; 95、梁柱東 1965; 123)。したがって、「完山」と「比斯伐、比自火」とは意味の上では関係づけられず、地理志巻34、新羅に、

火王郡本比自火郡、—云比斯伐、眞興王十六年置州、名下州、二十六年州廢、とあるのが正しい。藤田亮策は“下州が比斯伐—大耶—完山と移動したために、同名が各地に用いられ、三国史記の編者は、これを同一処と考えて、完山を比斯伐としたために全部が間違ってきたのである”と論証している。それはともかく、「火」は訓読して「伐」と対応されるものであり、

火日李

(雞林遺事)

火 pir hwa (불화)

(訓蒙字会下 F 35)

新羅地名多稱火、火乃弗之転 弗又伐之転(東国輿地勝覽 22 蔚山郡条)
その原初的な意味は、平原・平野とされている。

坪、伐、弗、火稱平野 新羅邑用之

(大東地志)

なお、一般に「伐」は日本語の「ハラ(原)」又は「バル」(九州地方)と一致していると言われている(金沢庄三郎)。

屈支>祁陽>昌平

辛兌鉉(1958; 90)は、「屈」は「祁」の意にあたるとみている。「祁」の「大、衆多、盛」などの字義からすれば、中世朝鮮語「kin」(큰, 大)と関係づけられなくもない。

大曰黒根

(雞林遺事)

大 kin tai (큰대)

(類合下 47)

なお、高麗時、改名である「昌平」の「昌」も、意味の上で結びつきそうで、

同様に思われる地名例もある。

郡梁県本百濟屈直県 景德王改名今新昌県 (三国史記卷 36 地理 3)

月奈>靈岩>靈岩

「月」を訓読する可能性は下記の例からも考えられる。

馬靈県 本百濟 馬突県 (一云馬珍) (三国史記卷 36 地理 3)

この場合、「突」は「珍」の訓として用いられたとして、李基文 (1975; 47) は、「*tur」と訓んだ。「珍」の読みはほかにもあって

波珍干岐 (ハトリカムキ) <日本書紀仲哀九年>

石山県 本百濟 珍惡山県 (三国史記卷 36 地理 3)

(石の訓は雞林遺事に「石曰突」とある)

などはその証として知られている。

そうすると、上記の「靈」と「突」との対応から、「月」においても訓読 (tar, 달) の可能性が生じるのであるが、前掲恭作 (1974; 313) は「奈」は「na」 (ナ、出づ) の音借とみて、「月奈」は“月が出づる”の意味として解読した。

一方、辛兌鉉 (1958; 92) は「月」を山の古訓「tar」の訓借とみて、「奈」を「nac」 (낫, 低) の音借とみれば、「月奈県」の意味は「低山県」になると推定した。

古良夫里>青正>青陽

「古良夫里」から「青正」にかわったのは、単に眞興王の設置した「十停」の衿色によったものである。したがって、意味の上で「古良夫里」と「青正」との

十 停 の 名 称				衿 色	景德王代の改名地名	
音	里	火	停	青	青	驍
古	良	夫	里	青	青	武
居	斯	勿	停	青	青	雄
推	良	火	停	黒	玄	驍
召	参		停	黒	玄	武
未	多	夫	里	黒	玄	雄
骨	乃	斤	停	黄	黄	驍
南	川		停	黄	黄	武
伐	力	川	停	緑	緑	驍
伊	火	兮	停	緑	緑	武 (推定)

結びつきは考えられない(李娟子 1976)。

眞興王の設置した「十停」と、景德王の改名には上表のような対応がある。

居斯勿>青雄>巨寧

前述のとおり、「居斯勿」から「青雄」にかわったのは眞興王の設置した「十停」の衿色によったものである。辛兌鉉(1958; 89)は「居斯勿」を「居斯十勿」のように分析して、それぞれ「kas」(災、荒)、「mir」(墨、水)の音借とみている。下記のような中世文献および三国史記の記録から「荒」の訓読表記は知られている。

荒山 kə^hir-moi

(龍飛御天歌十8)

居柒夫 或云 荒宗

(三国史記卷 44 列伝 4)

居知山、居一作屈、一云安陵>安波>長山

「居知」が「長」に対応できるとすれば、*kir(長)に再構されると論じている(都守熙 1976; 52)。「長」の訓は朝鮮館訳語に「日長~害吉大」と記載されており、実際、地名の記録からも推定できる。

永同県本新羅吉同県

(三国史記卷 34 地理 1)

季水県本百済季川県今長沢県

(三国史記卷 36 地理 3)

しかし、「居知」とは音相が違いすぎるし、「居知」または「安陵」と説明がむずかしいと考えられ、辛兌鉉(1958; 98)は、「居知」を「荒」の訓にあたとみている。

荒山 kə^hir-moi

(龍飛御天歌七8)

居柒夫 或云 荒宗

(三国史記卷 44 列伝 4)

沙平>新平>新平

原名「沙」は改名「新」にかえられたところから、中世朝鮮語の「sai」(새、新)にあたとみられている。実際、ほかの地名の記録にも同様に思われる記録がある。

新橋 / 賽得屢

(朝鮮館訳語)

新 sai (새)

(類合)

新良県 本百済 沙戸良県

(三国史記卷 36 地理 3)

新寧県 本新羅 史丁火県

(三国史記卷 34 地理 1)

首知一云新知

(三国史記卷 37 地理 4)

所比浦>赤鳥>徳津

「所比浦」が「赤鳥」にかえられたことによって、「所比」と「赤」とが対応しているとみられるが、「所比」は高句麗地名「沙非斤乙、沙伏(赤)」と類似していることが注目される。

赤木県 一云 沙非斤乙 (三国史記卷 37 地理 4)

赤城県 本高句麗 沙伏忽 (三国史記卷 35 地理 3)

李基文(1975; 46, 48)は上記のような類似を指摘し、「所比」から *supi を再構し得るならば、夫餘系単語の一例である可能性が大きいとみた。また「所比」は日本語の「そほ(椿)」とも一致している(馬淵和夫 1973; 570)。

なお、中世朝鮮語において「赤」は

赤 purkir cyək (불글적) (訓蒙字會中 30)

(以上 李 寅泳)

所非芳—云所非兮>森溪>森溪

原名「所非」は改名された「森」との対応から考えて見ると、「supi」と音借されたものであらうと考えられる。即ち、原名の表音式漢字の義を取って、表意式の漢語にかえたようである。これは、「森」とか「草木」を素材とした地名であり、現在慶南台泉の「sup^h-sir」(金豊、藪谷)、江原明州の「sup^h-sir」(林谷里)などのように残っている伝来地名と比較される。

都守熙(1976: 48, 49)は、この「所非」が前出の「所比(赤)」と同音異義語として見なされる可能性を論及したところもある。中世朝鮮語の文献に散見する「林」、「藪」の字は、その訓が「sup」(音)あるいは「sup^hur」(音)で、

sup su (音: 藪) (字會上 7)

sup^hur rim (音: 林) (光千文 31)

sup səriyai (音: 林間) (月朔 1: 24)

これは現代語においても、その語形を維持し、「sup^h」(金)および「sup^hur」(音)に表記されている。

この「sup^h」という語彙は、同系語である〈Tungus〉語の「supire, hupire 'thicket dense forest」'とも比較されるようであり、高句麗語においても、『三国史記』に登載されたものがあって、

朔邑県 本高句麗 所邑豆県 (三史卷 35)

その音を「sup-tə」(音)であらうと推定している(李敦柱 1971: 370)。

しかし、俞昌均(1960a: 35)によれば、「所」と「森」が共に音読され、齒音系の対応として見られる可能性を持っているという。「芳」においては、「丘斯珍芳」の例と同様に〈三国史記卷 36 地理 3〉には「芳」、〈卷 37 地理 4〉には「兮」と登載され、前間恭作(原¹⁹²⁵再¹⁹⁷⁴: 313)の見解によると、「芳」は「兮」の誤文として見られており、その字の改名である「溪」と対応させている。しかし、本『三国史記』に、この他の百濟地名「省大兮」、「丘斯珍兮」、「秋子兮」、「勿阿兮」などがあるが、次のように「溪」の字に改名されたものはない。

省大兮>蘇泰>蘇泰
 丘斯珍兮>珍原>珍原
 秋子兮>秋城>潭陽
 勿阿兮>務安>務安

一方、辛兌鉉(1958: 93)によれば、この「芳」をやはり「兮」の誤として見ており、この地名は今の長城郡森溪面であり、その伝来地名から考えれば、「所非兮」の三字を合わせて「sup-hir」(승히)と解読し得るのではないかと論及した。

大尸山>大山>泰山

「大」は、訓読されて「k^{hi}」(크)と読まれるようであり、

大雨: 捎必 <朝鮮館訳語>
 k^{hin} (큰: 大) <類合>

「尸」は、音借されて、当時の促音借として用いられた [s] 音と読まれたとすれば、「大尸」は「k^{his}」(크히)だったろうと見なされる(辛兌鉉 1958: 82)。

さて、「尸」の [s] 促音借は、他の地名にもすくなく現われ、

岬城郡 本百濟古尸伊県 (三史卷 36 地理 3)
 新復県 本加尸兮県 (三史卷 34 地理 1)
 野城郡 本高句羅也尸忽郡 (三史卷 35 地理 2)

等で、その音が語幹末音 [s] を表わすものとして一貫する。この故、訓音借された「大尸」(h^{his}) は、形容詞「k^{hita}」(大)の連体形である「k^{hir}」(히)、k^{hin} (큰)とも同じ形態として看做し得ると言った。

特に、俞昌均(1961: 31~35)によれば、『三国史記』地名に出てくる音節末音の表記法の中には、[-ts] 音の「次」とその類例である「子」「支」「自」が

あり、[s]~[si] および [r]~[ri] の「尸」があり、その他 [s] 音である「斯」「史」「西」「瑟」「栖」「思」などがあると見なした。

とにかく、「大尸山>大山」の改名は、三字地名から一字を省略し、二字地名に作ったものに過ぎないのであり(金亨奎 1959: 176)、特に高麗時代の改名である「大山>泰山」は、意味が似た他の漢字を取ってかえたものであろうと見られるが、俞昌均(1960a: 35, 1961: 30, 33)は、「大」と「泰」が共に舌音系の互用、あるいは [j] 音の韻尾として音読・対応される可能性を論及した。

珍同>珍同>今並因之

「珍」は「tor」(石)の訓借として使用された用例が多く、

石山県 本百済珍惡山県 (三史卷 36)

馬突 一云 馬珍県 本百済馬靈県 (三史卷 37)

「同」においては、「基」の訓である「tə」(타)と音借されたと思えば、「珍同」は「tork-tə」(돌타)、即ち「石地」の意味を現した地名であるが(辛兌鉉 1958: 78)、原名と改名された漢語との対応が困難であるため、確実な音の再構・推定が難しい。

珍惡山>石山>石城

「珍」は前出したとおり、訓借されて「tor」であり、「惡」はその音が「ak」であるため、「珍惡」はそれぞれ訓音借されて「torak」(돌악)、あるいは [k] 末音だけを取って「tork」(돌)としても見なされる(辛兌鉉 1958: 77、俞昌均 1961: 25)。これは他の地名である「馬突県一云馬珍」の対応からよく現われており、中世国語においても、現代語においても、「石」の字はその訓が「tor」として用いられる。

石日突 <鷄林遺事>

石: 朶二 <朝鮮館訳語>

tor (朶: 石) <字会上 4>

同じ見解として、都守熙(1976: 54)はこの「珍惡」を「turak」と訓音借されたと言っており、李基文(1961: 37)は「惡」(ak)を接尾語として見なし、現在全南地方の方言である「tok」(독)がその残影を見せていると言った。その他、金完鎮(1971: 72)も「tur」あるいは「tul」と解説している。

一方、梁柱東(1942: 153, 154)は二字共に音借である「ca-ak」(자악)として見て、「小石」(礫)の義と解釈した。それは次のような類例の地名が大東興

地図に顕出された縁由であるからだと言った。

進菓山(全北 錦山南)

自菓山(黄海 安岳山)

宰藏山、採菓山(慶南 永川南)

助菓島(全南 康津)

その他、前間恭作(1925: 309)は、〈三国遺事〉の〈讀者婆郎歌〉に出てくる「川里叱磧惡希」(解釈: 川の小石の)の用例を指摘しながら、この二字が音借されて「ca-ak」(자악)と読まれるのが正しいと論及した。金亨奎(1969: 53, 54)も同様な見解で、現代語の「ca-kar」(자갈: 礫)の古語である「cai-byək > cai-yək」の音韻変化を例示しながら、これは〈Manchu〉語の「cyahari」と関係があると言った。また、李崇寧(1954: 84)も同系語の比較語彙論の見地から見て、この語彙が〈Mongo〉語の「cilagun > ... > colo」の「cilag~」と一致し、〈Tungus〉, 〈Goldi〉, 〈Olcha〉語の「zoro」と「dolo」とも連結し得ると言った。

知六>地育>北谷

「知六」と改名された「地育」の対応は、原名の音と似た漢字に改めたようであり(金亨奎 1959: 1761 俞昌均 960a: 34, 44, 1961: 25)、その後、高麗時代の改名である「北」の字はその訓が「tui」(뒤)であるので、

tui pik (뒤 북: 北)

(字会中 4、類合上 2)

北泉洞: tuis saim kor (뒷샘골)

(龍歌二章)

「知」:「地」:「北」の対応が成立つようである。これは上古音から見れば、「地」=ti, 「知」=tʃi (董)であり、中古音では「地」=dʒi, 「知」=tʃiə (Karlgren)であり、東音では「地」は「知」と共に「ti」音であるので、ti(知)=ti(地)≡tui(北)の等式として当時の語彙を想定し得ると言う説も出た(都守照)(1976: 44)。趙載勲(1973: 28)も同じ見解を持っており、この地方は現在唐津郡にある「地谷」として見ている。一方、權相老(1961: 409)は、この地名が馬韓諸国の一つである「致利鞞」の転音であろうとの説も出した。

雉 壤

この地名はおそらく、動物の名前を素材としたのであり、地形が動物の形に似ていたとか、そのような動物が棲息したとか、民衆の信仰と関係があるから名づけたようである。本『三国史記』にも、「牛峯県」、「猪足県」、「馬句城」、

「鵝州県」、「兎山郡」、「鵠浦県」などが出てくるし、現在地名にも、「牛島」(全南莞島)、「猫島」(全南麗川)、「犬頭」(全南莞島)、「虎岩」(全南莞島)、「鴈島」(全南麗川)、「長蛇」(全南長沙)などが出てくると比較される(李敦柱 71: 383)。

しかし、またその音に関する考証は全然ないようである。

>会津>会津

豆脬>薑原>荳原

「豆脬」は「野」の訓である「tir (tiri)」の古形「tahir」(ㄊㄢ)であるが、その訛音「tutir」(ㄊㄣ)が「二」の訓と相通じるので、「荳原 (tubar)」に改名され、または「二合」の義から「会」の字として対訳されたと言う(梁柱東 1942: 414)。

この地名は、今の高興郡豆原面であろうと推定し、その後「会津」に改名したのを見ると、「豆脬」は二つの川(江)が合流する(二水会流)ところに違いない。それ故、音借で「tuhir」(二)という数詞が再構される。これは次のように新羅の郷歌にも登載されている。

二脬隱吾下於叱古 (處容歌)

新羅語にもその使用が確認されるし、『鷄林類事』と『朝鮮館訳語』にも次のように出現する。

二曰途孛 (turh, tubur 姜信沆 1975) (鷄林類事)

二: 靚卜二 (tupul 文旋奎 1972) (朝鮮館訳語)

さて、この「tubir」は「tubir>tuβir>tuir>tur」のように音韻変化したと見るのが一般的である。

一方、辛兌鉉 (1958: 90, 95) は改名された「荳原」を「tuhir」の強音である「tubir」として音写されたものと考えている。

とにかく、このような「合水地域」は現地名にも、「aurchi」(合水: 江原春城)、「aurachi」(並川: 洪川)、「hapsukəri」(合水: 旌善)などの例がある(李敦柱 1965: 382)。

豆乃山>萬頃県>萬頃

「豆乃」は音借されたものと見れば、「tun」(ㄊㄣ)になる。これは「turun—tun—tum」の互転であり、その意味は「圓」(四囲)、即ち「川」が囲んでいる山であると解釈し得る(辛兌鉉 1958: 80)。

これ以外にも、「四囲」の地理的環境から名づけられた地名は、〈大同輿地図〉に「豆音山」、「豆音只」、「豆無岳」、「豆毛岨」、「豆毛浦」、「斗迷」、「豆尾山」、「豆麻峙」、「都麻峙」などがあり、これらは全部「tum」の派生語として考えられる。

一方、都守熙(1976: 51)によると、「豆」=「萬」の対応から、「萬」の訓である「tumən」の再構可能性を次の例によって主張している。

女眞俗語 謂萬為豆漫 以衆水至此合流故名之也〈龍歌4章〉

第二十七德曼(一作萬)謚善德女大王姓金氏〈三遺卷1〉

豆仍只>燕岐>燕岐

原名と改名との音や訓の対応はできないが、前出の「豆乃」の地名のように、やはり「tum」の音借と見て、「圓岨」の義として考える見解もある(辛兌鉉 1958: 80)。都守熙(1976: 60)は前出の「豆盼」と似た地名である「tuhir」を表記したものではないかと見ている。これは、「仍」と「乃」とは相通じる字で、「nai」と解説し得る。特に、「豆仍只」(燕岐)にある「合江」という小地名はこれの後身であり、「会津」と比較できる好例であるためだと主張した。

また、この「豆仍只」は改名された「燕」の義から見れば、日本語の「つばくろ」と関係があるのではないかと考える説もある(馬淵和夫 1973: 571)。

豆伊—彥 狽武>杜城>伊城

原名の「豆」は改名の「杜」との対応から、「tʰə」(基)の音借だろうと考えられる。他の「豆」の用字例においても、「所邑豆界—朔邑界」があつて、「所邑豆」は「sup-tʰə」と読まれる。そうすると、「豆」(tʰə)は『三国史記』に散見される次の例とも相通じるようである(李教柱 1965: 116)。

長堤郡 本高句麗 主夫吐郡 (三史卷35地理2)

柴堤界 本柴吐郡 (三史卷34地理1)

「伊」は音が「i」で、「is」(ᄇᆞ)と「yas」(ᄇᆞ)の互転として認められるので、「yat」(低)の音借だろうと見られる。これは、一云の「牲」の訓が「iri」であるので、「iri—ir—it—yat」のように互転として考えられ、「yat」(淺)の訓借であると言えるし、「武」は音が「mu」で、「mi」(水)の音借と見られるためである。その結果、「豆伊」は「tʰə—yat」(ᄇᆞ ᄇᆞ)と解説できると辛兌鉉(1958: 81~82)はいう。

豆戸伊 -云 富戸伊>伊城>富利

辛兌鉉(1958: 84)によれば、原名「豆戸伊」は高麗時代の改名が「富利」であるため、「富戸伊」の誤であろうと言って、これを「par」(原、陽)が音借された「puri」と解釈している。

一方、姜吉云(1977: 56)は原名の「豆」を「小豆」の意味である「p^hat」(ㅍㅅㅈ)と読み、同系語の〈Turk〉, 〈Mon.〉, 〈Man〉の中で、「富」という語彙がそれぞれ「baya-」、「bayan」、「baya-」であるので、これと関係があるのではないかと推定している。

豆夫只>同福>同福

「豆夫」は音借「tum」で、改名された「同福」もやはり「tum」の音借として対応されたものであり、その意味は「圓城」だろうと言える(辛兌鉉 1958: 95)。この場合、[p]と[m]の互転の用例は、次のように他の地名からも現われる。

穴口郡 (甲比古次) 甲比=[kum] (꺾: 穴)

主夫吐県一長堤郡 主夫=[nim] (닐: 長)

同じく、俞昌均 ((1960a: 31, 1961: 25, 29) も、原名と改名は共に音読で読まれた可能性があつて、「豆」と「同」とは舌音系の対応であり、「夫只」と「福」とは喉内入声の韻尾としてその音が対応されると論及した。なお、「tum」が「円」の義とすれば、古代日本語の「円ツブラ」との関係も考えられる。

徒山 -云 猿山、海島也>牢山>嘉興

「徒」と一云の「猿」の対応においては、「徒」を「nai」(川)の訓借と見れば、「猿」の訓は「nap」であるので、その対応ができるだろう。つまり、「徒山」と「猿山」は「nais-moi」(나이모이)になり、その意味は「川山」で、海水に囲まれている山、即ち、「島」を示すと考えている(辛兌鉉 1958: 97)。

この場合、「nais-moi」(나이모이)と「nap-moi」(납모이)において、促音である[s]と[p]の互転は、「阿次[as]」と「壓[ap]海」の例のように可能であろうと解釈した(梁柱東 1942: 376, 493, 565)。

冬老>兆陽>兆陽

原名「冬老」は改名された「兆陽」の「陽」の字との対応から見ると、「tiri」

と音借されたものとして考えられ、その意味は「野」であろうと見られる(辛兌鉉 1958: 90)。これは、他の用例中、「馬老=蹄陽」の対応が見られたからであり、その意味は「地」特に「陽地」を現わしているようである。

さて、この「老」[ro]は、「羅」、「礼」、「良」、「奈」などのように、「国」あるいは「土」(地)を意味する、「na-」系統の接尾語であろうと見る見解もある(趙載勲 1973: 31)。

しかし、俞昌均 (1960a: 41, 1961: 29) は、「冬」と「兆」、「老」と「陽」がそれぞれ舌音系の音として音読・対応ができると主張した。

冬音>耽津>耽津

「冬音」は「耽」との音の対応から、「tum」の音借と見られ(俞昌均 1960a: 42, 1961: 28, 李基文 1972: 198)、その意味はやはり「圓形」、あるいは「四囲」で、山に囲まれている地形的環境を示しているようである(辛兌鉉 1958: 96)。

これは次のような記録からその対応を推定することができ、

鉄圓郡 一云毛乙冬非 <三史卷37>

漢孛山 在州南一日 頭無岳又云圓山 <世宗実録地理誌>

中世国語でも、「圓」の語形は「tum」、「turyə」として表記された。

turyət wən (두려원: 圓) <石千文 35, 光千文 35>

turyəur wən (두려물원: 圓) <類合下 48>

月圓: 得二朶略大 <朝鮮館訳語>

一方、この語彙はその類似形が同系語からも発見され、

<Tung> tun geleme 'round, circular'

<Mon> tögüig 'the round, something round'

現在の地名でも、「tumu-kor」(全南莞島)、「tum-kor」(全南莞島)、「tum-sir」(全南高興)、「tumu-sir」(江原固城)などがあって、比較される(都守熙 1976: 44, 梁柱東 1942: 108)。

埃坪>九阜>九阜

辛兌鉉(1958: 87)は、「埃」と改名の「阜」との対応から、「埃」の字は「堦」の誤として見て、「堦」は「塙」の俗字であるので、その訓を「ttuk」であると考えている。

「坪」は「平」と共に、訓借されて「pær」と読まれる。これは百濟地名から

も「雨坪」、「沙平」、「礫平」などの例が出、趙載勲(1973: 31)は「puri」の借字で、「原」、「野」の義であるが、前出の「雨坪>高沢>長水」の例から見れば、「江岸」あるいは「海岸」に位置している地域であり、現代語の「ppær」(咆)とも関係があると考えられる。

一方、都守熙(1976: 42)によると、「埃坪: 九阜」の対応から二つの見解が持てるようである。その一つは改名された「九阜」を「aku」(口)と訓読して、現代語の「akunji」(焚き口)と連結させるのである。

九: 阿戸 <朝鮮館訳語>

九曰雅好 <鷄林類事>

ahop ku (아홉구: 九) <字会下 34、類合上 1>

これは、「阜」の音が「ko」<字会上 3>であるので、その解読ができるし、または「埃=九」だけの対応から見ても、「九」の訓が「aku>ahu>ahop」のように考えられ、「埃=九=aku(口)」の解読もできると見られる。もう一つは、「九」を音読すれば、「埃坪」が「kutor」(炕)になると推定される。これは「阜=坪=原」の等式から「阜」の訓が「tiri」であるので、成立されると主張している。

kutir (炕、房) <字会中 9、光千文 35>

突山>盧山>突山

この地名は今の「突山島」だと推定し、「突」は前出の「馬突 -云 馬珍一馬靈」の用例から見れば、「tork」(呑: 石)と音借されたようである(辛兌鉉 1958: 94)。

徳近>徳殷>徳恩

「徳」は「正」の訓である「pari」と訓借することによって、「par」(原、陽)を音写し得るし(cf. 所比浦県>赤鳥県>徳津)。「近」は音として読めば、「徳近」が「parkin」となるが(辛兌鉉 1958: 84)、一方、二字共に音読したら「tyäkin」(더근)になって、「小」の義と関係が考えられる。

これは、「得安県 本徳近支」という記録があつて、「得安」と「徳近」とは音通するので、音借と見るができると考えられる。

特に、俞昌均(1960a: 26, 29, 1961: 24, 26)は、「殷」と「恩」との音読対応から、「徳殷」は「徳」の韻尾[k]が「殷」と繋がって「徳近」となったものと見て、これを、「伐音一富林」の場合、「伐」の末音が「音」に連結して

「林」と実現されたものと比較した。

とにかく、本地名「近>殷>恩」は、原名と似た音を取って改名したものに違いない。

遁支>富有>富有

「遁」は音借と見る場合、やはり前出のように「tun」で、「谷」の古訓であり、「支」は「城」を意味する接尾語であるので、「遁支」は「谷城」の義になる可能性もあるだろう(辛兌鉉 1958: 94)。

しかし、「遁」の音である「tun」を「ton」(錢)と連結して考えれば、

ton cyən (돈錢) <字会中 31、類合上 26>

「富」の意味と対応でき(趙載勲 1973: 28)、「遁支」は日本語の「とし」、「富む」との関係も考えられる(馬淵和夫 1973: 571)。

奈己>奈靈>金剛州

「奈」は「nac」(낮: 低)の音借であり、「己」は「城」の古訓である「ki」の音借と読まれ、その意味はやはり「低城」であろうと見た見解がある(辛兌鉉 1958: 63)。「己」が「ki」として音借され、「城」を示すのは、この他にも例が多い(李基文 1961: 37, 38)。

悦己>悦城

結己>潔城

梁柱東(1942: 865)も同じく音借と見ているが、「奈己」を「nais-ki」(나이키)と読み、〈廣開土王碑〉の「男居城」がこの地名(今、榮州)に該当するものであると言った。なお、古代日本語のキ乙との関係も考えられる。

難珍阿>鎮安>鎮安

「難」は「nop」(高)の音借と見なし(cf. 難等山 一云 高山)、「珍」は「tor」の訓借であり、「阿」は「a」と音借されたのであろうと解説した(辛兌鉉 1958: 88)。

特に「珍」において、梁柱東(1942: 326)は、

難珍阿 一云 月良阿 <麗史卷 57、地理 2>

の例を挙げながら、百濟地名に散見される「月」、「月良」、「突」、「埃」、「珍」、「靈」などはその原語が「tir」「tiri」(野)であり、新羅語の「梁」(tor, to)とも相通じ、〈梁書〉の「櫓魯」と同一語であると説明した。

「阿」は、都守熙(1976: 49)によると、「辺」の訓である「ka」となる可能性があると言う。

天辺: 哈嫩格自 〈朝鮮館訳語〉

kas pyən (ᄃᆞᆫᆫᆞᆫ: 邊) 〈字会中7〉

即ち、他の百濟地名に見える「甘勿阿」、「乃利阿」、「仍利阿」、「勿阿兮」などは全部「水辺」の意味で、その音価は「ka」であるが、先行語形の末音が「r」、あるいは「i」母音下であるので、「ka>a」のように「k」音が脱落したと言った。

抑在泳(1971: 149, 169)も、

阿: 大陵曰阿、水岸也、邸也 〈康熙字典〉

の例を挙げ、「阿」を「ka」(邊岸)や「tuk」(坂)として見ている。

任実>任実>任実

この地名は全然改名されなかったのであるが、「任」は「nim」の音借である「主・大」の意味であり、「実」は「谷」の古訓「sir」と音借され、「nim-sir」と読まれた(辛兌鉉 1958: 89)。その義は「主谷・大谷」で、梁柱東(1942: 436, 438)も同じ見解を持っている。

長堤郡 本高句麗主夫吐郡 〈三史卷35、地理2〉

nim cyu (ᄃᆞᆫ쥬: 主) 〈字会中1〉

これに反して、都守熙(1976: 55)は「任」はその訓である「mat」と読まれる可能性があり、

mas-star zim (ᄃᆞᆫᄃᆞᆫᆫᆫ: 任) 〈字会下31〉

mas-tir im (ᄃᆞᆫᄃᆞᆫᆫᆫ: 任) 〈石千39〉

mas-tir im (ᄃᆞᆫᄃᆞᆫᆫᆫ: 任) 〈類合下9〉

「mat」は「大・伯」の義と相通じるので、「任実」の意味は同じく「大谷」であるが、「mat-sir」として解説すべきであると主張した。

任存>任城>大興

「任」は上の「任実」と同様に音読すれば「nim」であり、訓読すれば「mat」と読まれるようである。辛兌鉉(1958: 77)はやはり「主・大」の義である「nim」の音借と解説し、「存」も「con」(存)の音借で、「con-cain-cais」の互転によって、「cais」(峴・城)とつながれている。それ故、「任存」は「nim-cais」(大峴・主峴)として解説される。

一方、都守熙(1976: 64)は「任」を改名された「大」との対応から見て、「任」を訓読し、「大」を訓読すれば、両字があたると言った。即ち、「任」の訓は中世語で前出のように「mat」であり、「大」は「伯」と義が相通じるので、「伯」の訓も「mat」であって、

mat paik (몬빅: 伯) <石千 15>

mat-acapi paik (몬아자비빅: 伯) <字会上 31>

mat-hyæŋ paik (몬형빅: 伯) <類合下 16>

その対応があたる。

この「mat」(大・伯)の語形は、同系語の <Mon.> 「-mat」、<Tung.> 「-mát」とも対比できる。

余陵夫里 → 竹樹夫里、仁夫里 > 陵城 > 陵城

「余」の音は「ni」であり、「陵」は音が「riŋ」であるので、「余陵」は音借されて「nir」と読まれるが、「nir-nit」の互転を考慮すれば、おそらく「yat」(低)の音借として考えられる。これは、他の地名「熱也山—尼山県」の例と比較すれば、「尼」の音「ni」が「yat」(低)に音写された点において似ている(辛允鉉(1958: 95)。

特に、俞昌均(1960a: 39)は、この地名の改名は所謂省略法によってかわったもので、「余陵夫里」から「余」を省いて「陵城」となり、「陵」を省いて「仁夫里」になると言っており、その故、「余」と「仁」は音の互用として対応されるものだろうと考えた。

「夫里」は音読の「puri」(原)であり、百濟地名から12回も重出し、これは新羅語の「pur, pər」(火、弗、伐)や高句麗語の「hor, kor」(忽)に対応される語彙である(李基文 1961: 37)。

奴斯只 > 儒城 > 儒城

「奴」は「no」の音借で、「斯」は[s]音の促音借と見て、「nis」(緩、延、連)として解説する(辛允鉉 1958: 78)。この場合は、改名された儒の訓が「noras」(노릇: 戯)、「noras-pac^{hi}」(노릇바치: 優伶)であるので、「niri」(緩、延、連)のような訓借ができると考えた。

特に、趙載勲(1973: 29, 30)は「斯」において、当時促音として使用された漢字として、「尸」、「斯」、「也」、「良」、「西」、「次」、「冬」などを提示した。

「只」は他の用例と同様に城の音借であると考えられる。

熱也山>尼山>尼山

従来、「熱也山」は「熱」と「尼」の対応から、二字が共に音読され、次の三つの見解を生じた。

- 。 「yat-moi」 (얏뵤: 低山) (辛兌鉉 1958: 74)
- 。 「ni, ni, nai-moi」 (느, 니, 뉘뵤: 壤山、土山) (梁柱東 1942: 36)
- 。 「nik-moi」 (뉘뵤: 熱山) (俞昌均 1960a: 38, 1970: 23)

しかし、都守熙(1976: 78~85)の詳論によると、

熱也山 尼城 魯山 新增恩山 <輿地図書上>

の記録から見て、「熱=尼=魯」の等式が訓借と繋がる可能性を持って、「熱也山」は「tapimoi~tapimoi」のように解説している。

熱: 得卜大 <朝鮮館訳語>

təur (뉘울: 熱) <類合>

特に、この地名から推定・再構し得る当時の語彙は次のものがあると言った。

- 。 「tap~ tap~」 (熱): 形容詞
- 。 「tap~」 (尼、止、盡): 動詞
- 。 「tupi, tung」 (僧、衆): 名詞

発羅>錦山>羅州

「発」はその音が「par」であり、「羅」は「ra」から「r」と音借され、

羅: 刺 <朝鮮館訳語>

nos ra (노라: 羅) <字会中 30>

結局、「発羅」は「park」(陽)の意味と解釈されたことがあるが(辛兌鉉 1958: 95)、はっきりその解説はわからない。

伐音支>清音>新豊

「伐音」は改名された「清音」との意味対応から見れば、「param」(바람: 風)の音借である可能性もあって、

風曰字續 <鷄林類事>

風: 把論 <朝鮮館訳語>

param p^huŋ (바람풍: 風) <字会上 2>

それ故、辛兌鉉(1958: 74)はこの意味を「風岷」として解釈した。また、「伐音村—富林県」の「伐音」、「富林」も「param」の音借と見た。

一方、姜吉云(1977: 54)は、「伐」と「清」との対応から、「伐」・「bolg-」の音借とし、これは同系語の〈Man.〉bolgo (清)、〈Mon.〉bolowson (清)、〈Turk〉berrak (清)と対比されるものと主張した。

「支」は、「只」、「己」と共に、高句麗語の「忽」とも比較される「城」の意味を示すものであろう。

儒城県 本百濟奴斯只県 〈三史卷35〉

潔城県 本百濟結己県 〈三史卷35〉

闕城郡 本百濟闕支郡 〈三史卷34〉

特に、

支潯県 本只三村 〈三史卷37、地理4〉

の例は、古代語の「支一只」の相応を示唆してくれるものである。

伐首只>唐津>唐津

「伐」を音読し、「首」を s 促音借として読んだら、「pəs」(噴)になるが、これは改名された「唐津」の地名から見ると、おそらく「pais」(噴：船)の音借だろうと考えられる。この他、「pais」(舟、船)を音借したものとしては、「別史」、「比史」の例があると辛兌鉉(1958: 76)は見ている。

伯伊 一云 伯海>壁谿郡>長溪

辛兌鉉(1958: 88)によると、「伯伊」は「pai」(船)の音借と見なして、特に一云の「伯海」は「船」を連想させると見ている。改名された「壁」は、似た音で記写したものであろうが、あるいは「壁」の訓が「param」であるので、

param pyək (벽谿谿：壁) 〈字会中5、石千21〉

とも考えられる。また、「江」や「海」の古訓である「para」の訓借としても考えられる。

一方、都守熙(1976: 64)は、「伯=壁=長」の等式から、「壁」と「伯」とは同音表記であり、「伯=長」は前出の「任=大」の対応で見たように、意味の類似のため、かえたものと解釈した。

伯 兄曰長 〈新字典〉

伯 長也 〈許慎：説文解字〉

同じく、俞昌均(1960a: 26, 31, 1961: 24, 30)も、「伯」と「壁」とは唇音系の互用および喉内入声の韻尾として相応し、「海」と「谿」とは喉音系声母

の互用および [-j] 韻尾として対応されると論及した。

半奈夫里>潘南>潘南

「半奈」は、意味はわからないが、後日、音が似た漢語を取って「潘南」にかえたようである。

特に、俞昌均 (1960a: 31, 42, 1961: 26, 28) によると、「半」と「潘」、「奈」と「南」がそれぞれ音読され、唇音系の互用、および [-n] 韻尾と、舌音系の互用として対応されると見ている。

波夫里>富里>福成

「波」は、音が「p^ha」で、「p^hat-pat」の転訛による「pat」(밭: 田)の音借と見られており、改名された「福成」においては、「福」の音が「pok」、「成」の訓が「ir」であるので、「夫里=富里=福成」は一致する(辛允鉉 1958: 95)。

一方、梁柱東(1942: 531, 697)によれば、「波夫」の場合は、同音・類音字を疊字することによって、初声の重子音を表示したものであり、「ppiri」(쁘리)と解説した。このような用例は、これ以外にも百濟地名に見え、それを例示した。

忠烈県 本百濟助助礼県 <三史卷 36、地理 3>

滄尾県 本百濟夫夫里県 <三史卷 36、地理 3>

歪 谷

「歪」ははっきりわからないが、「谷」は下の記録を見れば、おそらく「sir」と訓読されたようである。

絲浦 今蔚州谷浦也 <三史卷 3>

cf. (「sir」 為絲 <訓正解例>)

国音 谷亦謂之室 因俗而名亦從簡也 <澤堂集卷 9 斗室記>

比衆>庇仁>庇仁

「比」は他の用例から見れば、音借の「pi」として解説されたようであり、

赤鳥県 本百濟所比浦県 <三史卷 36>

柘舟 本百濟比史県 <三史卷 36>

比豊 本百濟雨述県 <三史卷 36>

それ故、「比」>「庇」の改名は、音が同一原の他の漢語を取ってかえたよう

である。

「衆」は、金正浩の〈大東地志〉に「比勿 ㄹ 衆」^{ㄹ 衆}と言う記録を見ると、確かに「mur」と訓読されたに違いない(趙載勲 1973: 26)。

mur to (물도: 徒、衆也) 〈字会上 34〉

しかし、俞昌均(1960a: 34, 38, 1961: 27, 29)は、「衆」と「仁」とを音借として対応させ、同音異記の関係であろうと主張した。

賓屈>斌城>仁義

「賓」は、改名された「斌」の訓が「pic^h」(𐄀)であることによって、「光」の音借だと考えているが(辛允鉉 1958: 83)、俞昌均(1960a: 31)によれば、「賓」と「斌」とは唇音系の互用で、音読して対応させている。

「屈」は、「忽」「骨」と共に「kur~kor」(城)であり、主に高句麗語に一般的に出現することを見ると、北方系語から浸触した語彙であるようだと見ている(都守熙 1976: 60)。

伏忽>宝城

碧骨>金堤

この「屈」は、同系語の〈Mon.〉xot (市・邑)、〈Man.〉golo (省)、〈Turk〉kurā (村)などの語彙と比較し得るようである。

比史>栢舟>泰江

「比史」は改名された「栢舟」の「舟」と、「泰江」に対応させて見れば、「pais」(舟)の音借と考えられるが(辛允鉉 1958: 90)、「比史」の東音が「pi」〈類合下 27、光千文 15〉と「sa」〈類合 39〉であり、〈字会上 10、類合上 9〉に登載してある「𐄀」の字の訓が「picat」(𐄀)であるので、「𐄀=栢」の可能性を賦与すれば、これは改名の「栢」の訓借としても考えられる(都守熙 1976: 47)。

しかし、俞昌均(1960a: 31)によれば、「比史」と改名された「栢」を共に音借の喉内入声の韻尾として対応されるものだろうと論及した。

夫夫里>滄尾>滄尾

「夫夫里」は前出したように、「ppuri」(𐄀)と音読され(梁柱東 1942: 531, 697)、これは「木根」、「根」として訓借されたこともあるが、すべて「par」

(原)の音写だろうと見ている(辛兌鉉 1958: 86)。

さて、「par」(原)は、新羅語の「伐」「弗」「火」以外にも、「夫里」「木根」「根」「平」「坪」「富戸伊」「藥」「斬」などと借用されて用いられている。(金沢庄三郎、1912)

分嵯 → 夫沙 > 分嶺 > 樂安

次の〈世宗実録地理志〉の記事から見ると、

樂安郡 本百濟分嵯郡 新羅改分嶺郡 一云 陽岳

「分嵯」は「夫沙」と共に、「pyət」(𪛗: 陽)の音借と見られる(辛兌鉉 1958: 90)。

陽: 別 <朝鮮館訳語>

pyət yaŋ (𪛗 양: 陽) <字会下 1、類合上 4、石千 2>

特に、俞昌均(1960a: 31, 34, 1961: 27)によれば、「分嵯」と一云の「夫沙」は、それぞれ唇音系と齒音系の互用として対応されると見た。

伏忽 > 宝城 > 貝州

梁柱東(1942: 201)によると、

伏龍県 本百濟伏龍県 → 盃龍 <麗史卷 57、地理 2>

宝城郡 本百濟伏忽 高麗成宗十五年改為貝州刺史 <東国輿地勝覽 40>の記録から、「伏・盃」「伏・貝」の互転を説明しながら、「伏」は「park-」(𪛗)の俗音である「pok」と音借されたものだろうと見ている。

「忽」は、本『三国史記』の百濟地名には一箇所の例しか見えないが、高句麗地名には 48 個も出ており、「村落、市、住居の集団、城邑」などの義である「xor」と読まれ、これは中世国語の「kor」(谷・洞)と比較される一方、同系語の〈Man.〉holo (谷)とも対応するものであろう(→「余陵夫里」)。

碧骨 > 金堤 > 金堤

「碧」はその音が「pyək」(𪛗)であるので、「pyət」(𪛗: 陽)の音借と見なされ、「骨」は「辟城 本辟骨」の記録から見ても、「kor」(城)の音借であるのがわかる。(→前項)

一方、この地名において、今の金堤が湖南地方の穀倉地帯の中心地であり、「pyə」(𪛗: 米)が多く生産されるところであるので、「pyək-kor」と言う地名と名づけられたと言う(洪思俊 1971: 119)。〈輿地勝覽〉に記載された汚川郡

山川面にある「合徳池」を「碧骨池」と言った事実を見ても知れると言う(趙載勲 1973: 28)。

稲: 別思 <朝鮮館訳語>
pyə to (벼도: 稲) <字会上 12>

買仇里 -云 海島也>膽耽>臨淮

「買」はその音が「mai」で、「mi」(水)の音借であり、「仇」は「kʰi」あるいは「kə」の音借として使用されたために、

仇火県>高丘県
仇刀城>大城郡

「仇里」も「kʰir」(豈: 大)の音借と解説し得る(辛兌鉉 1958: 98)。

都守熙(1976: 45)も「買」は百濟地名の中に「甘買 -云 林川」、「欣良買>喜安」のように現われ、その音が「mai」(咄: 川)で、夫餘系から流入した語彙だろうと考えている。同系語の中に、この語彙と比較できるのは<Mon.> müren (江)、<Man.> muke (水)である。「買仇里」が「mikuri」と解されれば、『古事記』下、『万葉集』135の「伊久理(里)」と関係づけられはしないか(mi-ikuri>miurki)。

馬西良>沃溝>沃溝

「馬西良」は次に出てくる「馬斯良」と同義で、「matna」(会)の音借と見なす(梁柱東 1942: 423) 一方、都守熙(1976: 40)によると、「馬」を「kərə~kura~kora」であろうと推定している。これは改名された「沃」の字との対応から、その訓が「korta」(갈타: 沃)だからである。特に、

韓山郡 本百濟馬山県 新羅因之<輿地勝覽卷17>

の例とか、「馬山、馬邑、韓州、鵝州」の記録から見れば、「馬=韓=鵝」のような等式成立の可能性があるようである。「韓」はその訓が「kara」であり、

cf. 下韓 (알리카라) <日本書記>

「鵝」は新羅語で、

鵝州県 本巨老県 <三史卷34>

の記録から考えて見ると、「馬」の音である「kərə」の再構が確かにできると主張した。

馬斯良>代勞>会寧

「馬斯良」は改名された「代勞」と「会寧」とを対応させて見ると、「mat-na」と音借されたようである。これは、「代勞」の義が「mat^ha」「matki」であり、「会」の訓が「mot」「mat-na」であるので、その対応ができ、意味はやはり「二水会流」だろうと考えている(辛兌鉉 1958: 91)。

梁柱東(1942: 423)も同一の見解で、改名された「代勞」が「任」の訓「mat」であるので、音借された「mat-nai」(맛내)と見られ、その義は「南方・南土」を指すものだろうと見た。

李基文(1972: 257)もやはり同じ見解で、高麗時代に「会寧」と改名したことを見れば、音借である「mat-nai」で、「会」あるいは「任」の訓である「mat-」によって「代勞」になり、その義は「南壤」であると言った。

これらに反して、都守熙(1976: 54)は前出の「馬西良」の用例と同様に「馬」を「kara-kar」などで、「代」の訓である「kar-」に対応させている。

馬突_{一云}馬珍>馬靈>馬靈

「馬突」は「馬珍」と共に「ma-tir」「ma-tiri」で、「南野」の義として解釈したが(梁柱東 1942: 423)、趙載勲(1973: 131)によれば、「馬」は Tungus 語の「ma」(堅)から縁由し、「甘」、「金馬」、「古馬」、「古彌」などの系語「kam」(kəm)と同じものとして見て、「kom」(熊)の totem と関係があると考えている。

都守熙(1976: 54)は「突: 珍」を「tura」(野)と読み、「馬」においては前出のように「kərə」と見て、「kərə-tura」(沃野)として解釈し、

馬靈廢県 在県南三十里 本百濟馬突県_{一云}馬珍_{一云}馬等良<輿地勝覽37>の記録から、「突=珍=等良」の等式が成立し、「野」の意味である「tura~tira~tora」を再構し得ると言った。これは中世国語にもその語形がそのまま維持され、「tiri」であり、その後「tir」に単音節化した。

一方、「馬」の訓が「mar」であるので、これを「mir」(水)の訓借と見て、「突」は音が「tor」、「珍」の訓も「tor」であるので、「馬突」、「馬珍」、「馬靈」は共に「tir」(入)からの音写だと考えられ、「mir-tir」(水入)と解説した見解もある(辛兌鉉 1959: 89)。

馬 首

「馬首」は、二字をそれぞれ訓読すれば、「mar-məri」になり、

馬：墨二 〈朝鮮館訳語〉

馬曰末 〈鷄林類事〉

mar ma (말마：馬) 〈字会上 19〉

この地名はおそらく地形の形から名づけたものだろうと考えられるが、別にこれに関する考証はない。

馬尸>伊山>伊山

「馬」はその音が「ma」であるので、これを「mis」「mir」(水)の音借と見なし、「尸」は前出のように促音借と考えれば、「馬尸」は「水山」の義となるようである(辛兌鉉 1958: 75)。

馬老>睇陽>光陽

「馬老」は改名された「睇陽」との対応から見れば、「睇」の訓である「maru~maro」(乾)と音借されたと考えられる(辛兌鉉 1958: 94、都守熙 1976: 55)。

路乾：吉墨勒大 〈朝鮮館訳語〉

marmar kan (말갈간：乾) 〈字会下 12〉

marar co (말갈조：燥) 〈類合下 48〉

未谷>昧谷>懷仁

「未」は「昧」と共に「mit」(下、底)の音借であり、「谷」は古訓の「tun」と訓借され、その意味は「下谷」として解釈し(辛兌鉉 1958: 80)、一方、梁柱東(1942: 176)は、

水谷城隍 一云 買旦忽 〈三史卷 37、地理 4〉

の例を挙げながら、「未谷」と「昧谷」は「mai-tan」と読み、「水谷」の義であろうと見ている。

とにかく、「未>昧」の改名は、意味の共通性はないが、音が似た漢字を取ってかえたものに違いないだろう(金亨奎 1959: 176、俞昌均 1960a: 31, 1961: 31)。なお、「買」を「ミ」、「谷」を「タン」とすれば、「水谷」は日本語の「ミズタニ」と関係あるか。

未冬夫里>玄雄>南平

「未冬」を「mit」(底)と音借されたものとして見れば、「未冬夫里」は「底原」「下原」の義と解釈し得る(辛兌鉉 1958: 89)。

景德王の時代に改名した「玄雄」は、眞興王が設置した「十停」の衿色(黒色)によるのであり、

推良火>玄驍

召参 >玄武

未冬(多)夫里>玄雄

地名の意味とは関係がない(李娟子 1976: 363, 364)。

武珍州 -云 奴只>武州>光州

「武」の音は「mu」で、「mi」(水)の音借と見なし、「珍」は「tor」と訓借されたものと見なせば、「武珍」は「mi-tir」(水入)として解説され、これは、「馬珍」「馬突」「馬靈」「買珍伊」などとも音写されたと見られる。「奴只」は「nais」(川)の音借と考えられると辛兌鉉 (1958: 89) は推定した。

武斤>武邑>富潤

「武」は上記例のように「mi」(水)の音借で、「斤」はその訓が「nar」であるので、

nar kin (느근: 斤) <字会下 34>

「narA」(나마: 津)の訓借ではないかと考えられる。つまり、「武斤」は「mir-narA」(水津)であり、改名された「武邑」は「mir-kor」と解説し得るようで、高麗時代にはこれを「富潤」として意識改名したようである(辛兌鉉 1958: 87)。

武戸伊>武靈>靈光

やはり、辛兌鉉 (1958: 93) の見解によると、「武」は前出例のように「mi」(水)の音借で、「戸伊」は改名された「靈」の訓が「tar」であるので、「tir」「tiri」(入)の音写として見た。それ故、「武戸伊」は「mi-tiri」(水入)と解説され、他の地名「買珍伊」「武珍」「水入伊」などと相通じる。

一方、梁柱東 (1942: 95) は、「尸」と「靈」の対応から、「尸」が「r」音の促音借されたものと考え、「muri」と解説した。「尸」が促音借された場合は、

大部分「s」音であるが、「r」音とも用いられたものと論及し、次のような用例を挙げた。

有鄰郡 本高句麗干尸郡 <三史卷 35、地理 2>

安賢郡 本阿尸兮県 一云 阿乙兮 <三史卷 34、地理 1>

歛平 一云 武平 > 昇平 > 昇州

「歛」の字は、<世宗実録地理志>には「敵」と記載され、おそらく「敵」の誤字ではないかと考えられ、その音が「sap」であるので、「sais」(𐏪: 新)の音借として解説し得るだろう(辛兌鉉 1958: 94)。

一方、俞昌均(1960a: 34, 1961: 24, 29)は、「敵」と、改名された「昇」とを音読し、歯音系の互用および唇内入声の韻尾として対応できるものであろうと論及した。

毛良夫里 > 高歛 > 高歛

都守照(1976: 45, 46)によれば、「毛良」は音読して「muraŋ」になる場合と、「毛」だけを部分的に訓読して「təraŋ」になる場合の二つの解説の可能性を提示した。これは、その意味を改名された「高」の義に対応させて見たからである。

まず「muraŋ」の場合は、中世国語の「棟・宗・梁」などの訓である「mara」(𐏪)に対応され、

梁: 墨勒 <朝鮮館訳語>

mara coŋ (𐏪 𐏪 宗) <字会上 32、類合下 55、石千 36>

mara toŋ (𐏪 𐏪 棟) <字会中 6>

その意味の類推ができるからである。

李基文(1961: 37)も、「高」を意味する百濟語が「毛良」(mora)と似た音で、新羅語の「高處」を意味する「mara」と同一語源であろうと言った。

一方、馬淵和夫(1973: 572)は、この語彙が日本語の「盛る」あるいは「森」と関係があると考えられると示唆したことがある。

もう一つの「təraŋ」と読まれる場合は、「毛」の訓が「tər」(𐏪)であるので、

tərək mo (𐏪 𐏪 毛) <字会下 3、類合上 14>

tər ptitta (𐏪 𐏪 毛) <字会下 12>

鉄圓郡 一云 毛乙冬非 <三史卷 37>

の例から見ても、その訓借の可能性があり、特に高句麗語の「tar」(達)が「高」の意味と一致するので、それとも関係があらうと考えられる(都守熙 1976: 55, 56)。

勿居>清渠>清渠

原名「勿居」は音借されて「mərke」で、改名の「清渠」と対応する(李基文 1961: 37, 都守熙 1976: 62)。中世国語で、「清」の訓は「mark-」であり、

清: 墨大 <朝鮮館訳語>

makar ch'ŷəŋ (물곶청: 清) <字会下1、類合下48>

mark-ko (물고: 清) <月积2:12>

「渠」の音は、上古音(董)が「g'iwo」、中古音(Karlgren)が「giwo」、東音<字会中6>が「kə」で、「mərke-」の語幹末音の表記だったと見ている(都守熙 1976: 62)。

一方、姜吉云(1977: 54)によれば、「勿居」はやはり音借の「mulg-」(清)で、前出の「伐音」の「bolg-」から「bolg->molg->malg-」のように変遷したと主張した。

とにかく、この地名はその地理的環境の「清い水(川)」から名づけられたのであり、現在全南務安に「markinai」(말근내: 清川)、江原平昌に「murp'urəi」(물푸레: 水青里)、江原洪川に「murkəri」(물거리: 物巨里)などの伝来地名があって、「勿居」と対比される(李敦柱 1971: 382)。

勿阿兮>務安>務安

「勿」は音が「mur」で、「mir」(물: 水)の音借と見られる。それは、次のような同一例の他の地名が出てくるからである。

史勿県>泗水県 <三史卷34>

徳勿県>徳水県 <三史卷35>

「阿兮」は二字合わせて「arhai」(알하: 下)の音借と推定したこともあるが(辛允鉉 1958: 97)、

下: 阿頼 <朝鮮館訳語>

arai ha (아래하: 下) <字会下: 34>

都守熙(1976: 49)は、前の論及のように「阿」の一字だけを「ka」(辺)の音借と見て、「r」音下に[k]脱落のため「a」になったと説明した。

一方、俞昌均(1960a: 26, 31, 1961: 21, 26)は、「勿阿」と改名の「務安」

との対応を音読として見て、それぞれ唇音系と喉音系の互用だろうと解釈した。

也西伊>野西>巨野

「也西」>「野西」の改名は、音が似た漢語を取ってかえたようであり、この解読において、辛兌鉉(1958: 83)は「yati」(低)の音借ではないかと考えている。

また、俞昌均(1960a: 26)も、「也」と「野」との対応に対して、同じ類例を挙げながら喉音系の互用として説明している。

關也山>野山

也戸忽>野城

とにかく、この地名は、原名の三字の中に、一字は音が同一な漢字にかえ、他の一字は省略した例で、他の地名にも出てくる(金亨奎 1959: 177)。

野山県 本百済關也山県 今朝山

熊川 一云 熊川州、熊津>熊川州、熊州>公州

「熊」は訓読して「koma~kuma」であり、この地名は「totem」に基因して名づけたものだと考えられ、「kVmV」型である「甘勿」「金馬」「古麻」「古馬」「古莫」「古彌」「固麻」「久麻」「蓋馬」「乾馬」「昆彌」などの多くの地名がこれと関係があるだろう。

この語は、〈古代日本語〉kuma, 〈Lamut 語〉kuma, 〈Tungus 語〉kuma と一致比較され、高句麗と新羅語に発見される。

功木達 一云熊閃山 〈三史卷 37〉

熊神県 本 熊只県 〈三史卷 34〉

特に、都守熙(1974: 77)の詳論によれば、この「koma」語の根源は B.C. 3000 年頃東北 Asia を拠点として、Asia の全域と Finland, Lapland から北部 America の北端にかけて、広範囲に伝播されたものだろうと推定した。

「津」も次の例を見ると、訓読して「nara」と読まれたようである(李基文 1961: 37)。

熊津: koma nara (고마-나-르) 〈龍歌 3: 15〉

nara cin (나-르-진: 津) 〈字会上 5〉

久麻那利(怒利) 〈日本書紀〉

欲乃>谷城>谷城

辛兌鉉(1958: 94)はやはり「欲乃」を「yan」「yat」の音借で、「低」の意と解釈することによって、「也西伊」「熱也」などの地名と類義的なものとして見て、梁柱東(1942: 111)川は、「乃」の一字を「奈」と共に「川」「壤」の義である「nai, nai」の音借と考えた。

一方、馬淵和夫(1973: 572)によれば、「欲乃」は「よど」(淀、澱)を意味し、「谷」との関係があらうと考えて、日本語と繋いだ(ただし、「乃」が「d」の音を持っていたとして)。

餘村>餘邑>餘美>海美

「餘」は朝鮮時代に改名された「海」との対応から見ると、その訓が「namu~nami」であるので、

namar yə (나몰여: 餘) <類合下 58, 石千 2>

対応の可能性が認められる(都守熙 1976: 42)。

特に、改名の「美」は語幹の末音を忠実に表記したものだろうと考えている。

これは、高句麗語にも、

瀑池郡 本高句麗内米忽郡 景德王改名今海州 <三史卷 35>

内米忽 一云 池城 一云 長池 <三史卷 37>

の例から、「内米」:「池」:「海」の対応が見られ、おそらく、<Tung.> namu (海)、<古代 Japan.> nami (波)とも比較し得る語彙であろうと考えられる。

「村」が「邑」に改名されたのは、互いに意味が似た漢字同志にかわったようであり、この他の同例もある(金亨奎 1959: 177)。

新邑県 本百濟新村県 今保寧県 <三史卷 36>

鳥山>孤山>礼山

「鳥」の音と、改名された「孤」の意を連結することは、すでに丁茶山によって指摘された事実であるが(趙載勲 1973: 28)、やはり「鳥」と「孤」の対応は「孤」の訓が「oi-」(외)であるので、

oirooir ko (외로일고: 孤) <字会下 3, 類合下 44>

「鳥(o)」≡「孤(oi)」≡「礼(yai)」の等式の成立し得る可能性が認められると言った(都守熙 1976: 53)。

この地名は、山勢によって、「黃等也山」(連山)と「熱也山」(尼山、盡山)

の命名と同様に、山形が別に離れているから名づけられた山名であるだろう(梁柱東 1942: 119)。

慰礼>妣山>稷山

梁柱東(1942: 570, 571)は「慰礼」を「par>Bar>ar」の音転による「uri」(原)に音借されたと解説したが、適切な考証は出ていない。

栗支>栗原>原栗

「栗」は「pam」の訓借で、

pam ryur (팜륜: 栗) <字会上 11>

「支」は「cai」(岬・城)の音借と考えられるが(辛兌鉉 1958: 92)、改名された漢語との対応が別にあるから、確かな考証は難しそうである。

礫坪>磧城>磧城

「礫」の訓は「caiak」で、改名の「磧」の訓である「caik-pyæri」と相応し、「坪」は前に出てきたように「pær」の訓借であると見られる(辛兌鉉 1958: 87)。

即ち、「礫」>「磧」の改名は、意味の同じ漢字がそれぞれかえられた例である。

黃等也>黃山>連山

「黃」の訓は「nuri」で、

黃雲: 努論故論 <朝鮮館訳語>

黃曰 那論 <鷄林類事>

nurir hwan (누를왕: 黃) <字会中 30>

「等」の訓は「tir」であるので、二字が共に訓借され、「也」は音借と見れば、合せて「nuræri」として解説される(都守熙 1976: 66~78)。これは改名された「連」の義が「nuri」であるので、それと対応ができるためであり、その意味は「連續、連接、繼續」として解釈される。

さて、この地名は現在「論山」(non-moi, nor-moi)に残っているので、その訓借が認められ(趙載勲 1973: 38)、三字地名から一字を省略して、二字地名に改名したものに過ぎないだろう(金亨奎 1959: 176)。

黃述>黃原>黃原

「黃」は上記例のように「nuri」の訓借で、やはり「緩、延長、連」の意味と見られ、「述」は「suri」(峯)の音借で(辛允鉉 1958: 96、都守熙 1976: 58、梁柱東 1942: 321)、

牙述>陰峰 一云 陰岑

述爾忽 一云 首泥忽>峯城 <三史卷 35, 37>

結局、「黃述」は「連峰」の義と解釈されるだろう。

一方、俞昌均(1960a: 23)は、当時「原」が「述・支・附・兮・城」などの字の訓として使用されたと言って、その対応地名の例を挙げた。

栗支県>栗原県

豆兮県>蘆原県

丘斯珍兮県>珍原県

臂城>西原

(以上・洪 思満)

第三章 音 韻 組 織

如上の考察を経て、古代百済語における音韻組織の解明を試みようとする。しかしすでに第一章でふれたごとく、ここで百済語の資料とするのは、『三国史記』『三国遺事』において百済の地名としているもののみであって、実はもっと広く、高句麗の地名としているものや、新羅の地名としているものの中にも百済語と認むべきもの、またはその逆に、百済語としているものの中にも、高句麗語や新羅語さらに韓語があるかもしれない。ついでに言えば、古代朝鮮において三国の言語が別々であったのか¹⁾、あるいは、三国成立以前の言語状態はどうであったのか、等々の難問が横たわっているが、ここでは、三国鼎立時代の各国の言語の状況を推定した上で、これらの諸問題解明への手がかりを得ようということとする。したがってここでは、『三国史記』『三国遺事』に

¹⁾ 百済で「夫里」を表わす、「城」の音の語が、新羅では火伐など、高句麗では「忽」などで表わされている著名な事実は、恐らく祖語は同じでも、その発音はおのずから異なっていたであろうと想像される。これは三国の言語が異っていたという推測の一つの根拠となるであろう。藤井茂利氏「推古時代のオ列音表記の音仮名朝鮮漢字音の受容に関して」(『国語国文蔵摩路』第22号、昭和53年3月)

において百済の地名として記録しているもののみを取り上げることにする。勿論、行論の都合上、他国の言語についても触れるところはおのずからある。

さて、百済語の音韻組織の解明であるから、訓の漢字は除外する。とはいっても、音が訓が諸説あって定めがたいものがすくなくない。原則的に言えば、一言語を表記する文字に、音と訓の両方があることは、文字使用の実際からいってはなはだ不都合なことであるが、現代日本の表記において、

古代 古語 古生物...

に対して、

古手 古女房 古新聞...

などの表記があることを考えると、古代朝鮮においても、漢字の音訓使用が一定していなかったであろうことは認めざるを得まい。たとえば、

馬西良 馬斯良 馬突

らの地名の馬は、訓によって /kərə~kara/ として解する説が有力である一方²⁾、

馬老 金馬 古馬弥知

などは /ma/ として解する方が自然のようである。そうかといって、音使用の漢字は常にその類だけ、訓使用の漢字も常にその類だけで用いるという傾向があれば、それは有力な極め手になるかも知れないが、そうもいかないようである。結局は一語一語について考察をめぐらすというよりしょうがない。そういうわけで、本章の資料として用いる地名は次の 133 語である。ただし、異なり表記数は 176 種である くゝ は訓の漢字と思われるもの。-は複合語の構成要素間に引く。=は同地名の異表記間に引く。()はここで音の資料とはしなかったもの。

阿次(山県) 阿且(城) 阿老(谷県)=野老(県) 因<珍>(島郡) 烏(山県) 烏次(県)=烏兒(県) <雨>述(郡)=比<豊>(郡) <雨>坪(県) 悦己(県)=悦<城>(県)=豆陵尹(城)=豆串(城)=尹(城) 于召(渚)=紆洲(県) 閼也(山県)=野(山県) 加林(郡)=嘉林(郡) 加知奈(県)=加乙乃 皆<火>(県)=加弗(城) 甘勿阿(県)=威悦(県) 甘買(県) 何老(県) <牙>述(県) 伎伐(浦)=只<火>(浦) 岐<淵>(県) 共伐共(県)=只伐只(県) 金馬(渚都) 季<川>(県)=季<水>(県) 居拔(城)=固麻(城)=居伐 今勿(県)=今武(県) 基(郡) 丘斯<珍>兮(県) 其一買(県) 居知(山県)[居一作屈] 仇知(県)=仇智(山県) 仇知只(山県)

²⁾ 第二章

仇次礼(県) 比斯伐=比自<火> 屈乃(県) 屈支(県) 屈旨(県)=屈直(県) 菓支(県)=菓兮(県) <月>奈(郡) 結己(郡) 古龍(郡) 古沙—夫里(郡) 古良—夫里(県) 居斯勿(県) 古尸伊(県) 古西伊(県) 古馬—弥知(県) 古馬弥 古弥(県)=昆湄(県) 昆弥(川) 古祿只(県)=巨老(県) 欣良買(県) 塞琴(県) 沙平(県) 沙(峴城) 沙(口城) 沙(井城) 沙(道) 沙尸良(県) 支羅(城) 斯紀本 只良肖(県) 屎(山郡)=折文 至(山郡) 省大兮(県)=蘇泰(県) 上老(県) 上渠(県) 実於(山県)=<鐵>冶(県) 首冬(山県) 述(川城)所力只(県) 助助礼(県) <松>弥知(県) <秋>子兮(郡) 進仍乙(郡) 省大兮(県) 多只(県)=多岐(県) 乃利阿(県) 仍利阿(県) 大且(城) 大豆(城) 所—夫里(郡)=扶余(郡)(=泗泚) 所比(浦県) 所非兮(県) 大尸(山郡) 知六(県)=地育(県) 豆盼(県) 豆乃(山県) 豆仍只(県) 豆尸伊(県)=富尸伊 豆夫只(県) 冬老(県) 冬音(県) 埃坪(県) 突(山県) 德近(郡) 遁支(県) 奈己(郡)=奈<靈>(郡) 難<珍>阿(県) 任夷(郡) 任存(城) 兮陵—夫里(郡)=<竹樹>夫里=仁—夫里 奴斯只(県) 熱也(山県) 發羅(郡) 伐音支(県) 伐首只(県) 伯伊—作海(郡)=壁<谿>(郡) 半奈—夫里(県) 波—夫里(郡)=富里(県) 比<衆>(県)=庇<仁>(県) 賓屈(県) 比史(県) 斧(峴城) 斧(壤) 釜(山) 夫夫里(県) 分𨾏(郡)=夫沙 伏—忽(郡) 碧骨(県) 買—仇里(県) 馬老(県) 末(谷県)=昧(谷県) 末冬—夫里(県) 武<珍>(州)=奴只 武斤(村県) 武尸伊(郡) 毛良—夫里(県) 勿居(県) 勿阿兮(郡) 也西伊(県) 欲乃(郡) 烏(山県) 慰礼(城) <黄等>也(山郡) <黄>述(県)

これらの漢字の処理の仕方は、旧稿『『日本書記』中の朝鮮資料をとおしてみた古代朝鮮語と古代日本語の音韻組織の対比について』(アグノエル先生記念論文集<未刊>)、ただしその原型は『未定稿』第10号(昭和37年)にある。)と同じである⁸⁾。すなわち、語の頭音、語中音、語末音に分けて、その漢字の上古音(薰同蘇氏『上古音韻表稿』による)に基いて考察しようとするものである。

⁸⁾ 俞昌均氏に「古代地名表記の声母体系」(『青丘大学論文集』3, 1960)以下の論文(本稿文献目録参照)があるが、三国を一括して扱ってられるなど、やや拙考とは異なる。

1. 頭音字

頭音字として取り上げられるのは次の通りである。(夫里・買・弥知はそれぞれ一語とし、それぞれの最初の字を頭音字とする)

阿₃ [·â]=野₁ [d̪iag] 因₁ [·ien] 烏₄ [·âg] 悦 [jiwät]=豆₂ [d'ûg]=尹₁ [giwän] 于₁ [ɣiwag]=紆₁ [·iwag] 闕₁ [·ât]=野₁ [d̪iag] 加₄ [kâ]=嘉₁ [ka]=皆₁ [ked] 甘₂ [kâm]=咸₁ [ɣəm] 何₁ [ɣâ] 伎₁ [g'ieg]=只₃ [k̠ieg]=共₂ [g'jung] 岐₁ [g'ieg] 金₁ [k̠jəm] 季₂ [k̠iwəd] 居₄ [k̠iag]=固₁ [k̠ag] 今₂ [k̠jəm] 基₁ [k̠iag] 丘₁ [k'iwäg] 其₁ [g'ieg] 仇₄ [g'io̯g] 屈₄ [k̠iwät] 菓₂ [kwâ] 結₁ [kiet] 古₉ [k̠ag]=昆₂ [kwön]=巨₁ [g'ia̯g] 欣₁ [xiän] 塞₁ [sök] 沙₃ [sa] 支₁ [k̠ieg] 斯₁ [sie̯g] 折 [t̪iat] 屎₁ [šied] 至₁ [t̪ied] 省₂ [seng]=蘇₁ [sâg] 上₂ [ziang] 実₁ [d'iet] 首₁ [xiög] 述₁ [d'iwät] 所₄ [sag] 助₁ [dz'ag] 進₁ [tsien] 多₂ [tâ] 乃₁ [nôg] 仍₁ [niäng] 大₃ [t'äd] 知₁ [t̪ieg]=地₁ [d'ied] 豆₂ [d'ûg] 冬₂ [tông] 埃₁ [d'wät] 突₁ [d'wët] 德₁ [tök] 通₁ [d'wän] 奈₂ [nâd] 難₁ [nân] 任₂ [niäm] 余₁ [ni̯er]=仁₁ [ni̯en] 奴₁ [nâg] 熱₁ [ni̯et] 発₁ [piwät] 伐₃ [b'iwät] 伯₁ [pwäk]=壁₁ [piek] 半₁ [pwân] 波₁ [pwâ] 比₃ [pied]=庇₁ [pied] 賓₁ [pien] 富₁ [pien] 斧₂ [piwag] 釜₁ [piwag] 夫₂ [piwag]=分₁ [piwän] 伏₁ [b'iwök] 碧₁ [piek] 買₂ [meg] 馬₁ [mwäg] 未₂ [miwäd]=昧₁ [mwäd] 弥₄ [mier] 武₃ [miwäg] 扶₁ [b'iwag] 毛₁ [môg] 勿₂ [miwät] 也₁ [diäg] 欲₁ [giuk] 慰₁ [·iwäd]

ただしすでに述べたごとく、これらの字がすべて音読の字であったかは、いまだ確実とはなし難い。ことに1例しかない珍しい字は訓読の可能性がないことはない。

これらの漢字を上古音に従って整理してみるが、ただ頭音のみならず、音節文字の常として、それに続く母音もまた一応の考慮に入れて整理しなければならない。その結果は次表 I の如くなる。

頭子音の考察からはいらる。

[k] は非常に多くの種類の母音と結び付いているから、一音韻として立ち得る。

[ɣ] は「何老 [ɣâ lôg]=葛草 [kât ts'ôg]」「甘勿阿 [kâm miwät â]=咸悦 [ɣem jiwät]」の例があるから、/k/ の中に含める。

[x] も「欣」のみであるから、/k/ の中に含める。

[k̠] は [k̠ieg] として、「支」「只」に現われる。これが [k] の音を表わすか

表 I

・â 阿 ₃	・ien 因 ₁	・âg 烏 ₄	・iwag 紆 ₁	・iwăd 慰 ₁
・ât 闕 ₁				
ʔâ 何 ₁			ʔiwag 于 ₁	
ʔwâŋ 黄 ₁			jiwăt 悦 ₂	
kâ 加 ₁ 嘉 ₁	kiet 結 ₁	kjag 居 ₄		kjəm 金 ₁ 今 ₂
kâm 甘 ₂	kjeg 只 ₃ 支 ₁	kâg 古 ₃		k'iwăg 丘 ₁
ked 皆 ₁		kâg 固 ₁		kjwăt 屈 ₄
	g'ieg 伎 ₁ 歧 ₁	g'iag 巨 ₁	g'iôg 仇 ₄	
			g'jung 共 ₂	
			g'iag 其 ₁	
			g'iən 近 ₁	
			giuan 尹 ₁	kwən 昆 ₂
kwâ 菓 ₂			xjăn 欣 ₁	
sa 沙 ₄	sjeg 斯 ₁	sâg 所 ₄ 蘇 ₁	sâk 塞 ₁	
	sjed 屎 ₁			
	seng 省 ₂			
	tsjen 進 ₁	ziang 上 ₂	xjög 首 ₁	
		dz'ag 助 ₁		
tâ 多 ₂	tjed 至 ₁	tjat 折 ₁	tông 冬 ₂	tâk 德 ₁
t'âd 大 ₃	tieg 知 ₁			

	d'jed 地 ₁		d'ûg 豆 ₅		d'wat 塊 ₁	d'iwat 述 ₁
	d'iet 実 ₁				d'wât 突 ₁	
nâd 奈 ₂	ñier 忒 ₁		nâg 奴 ₁		d'wân 通 ₁	
nân 難 ₁	ñjen 仁 ₁	njat 熱 ₁		ñjem 任 ₂		
				nâg 乃 ₁	ñjəng 仍 ₁	
						pjwǎn 分 ₁
pwāk 伯 ₁	pjed 比 ₅		pjwāt 発 ₁			
	pjed 庇 ₁		pjwag 斧 ₂			
			夫 ₁₂			
pwâ 波 ₁	pjen 賓 ₁		pjwag 富 ₁			
pwân 半 ₁	pick 碧 ₁					
	壁 ₁					
			b'jwāt 伐 ₃			b'jwǎk 伏 ₁
			b'jwag 釜 ₁			
			扶 ₁			
mwäg 馬 ₁			meg 買 ₁	môg 毛 ₁	mwâd 昧 ₁	mjwǎd 未 ₂
			mjwag 武 ₂			mjwāt 勿 ₂
		diag 也 ₁ 野 ₂		giuk 欲 ₁		

[j] の音を表わすかが問題であるが、[ie] と結びつき、[j] の方は「斯 [sieg]」という字があり、[k] との「結」びつきはこれ以外には「結」のみであるから、やはり [k] の音を表わしたものであろう。また、「菓支 [-kieg]=菓兮 [-rieg]」という例もある。

[g'] には、「伎伐浦 [g'ieg b'iwät-]=只火浦 [kieg xuâr-]」「仇知 [g'îog tieg]=金池 [kiəm d'ia]」「仇知只 [g'îog tieg kieg]=金溝 [kiəm-]」などの例から考えれば、g'=k=k と見得るであろう。こうしてみると、以上の諸音は /k/ の一音に帰する。

[s] [s'] [x] [z] などはそれぞれ別の音韻であったとは考えられないから /s/ にまとめてよかろう。[ts] [dz'] はここで見る限りは一音とは立てにくい。なお、「仇首 [g'îog xiog]=貴須 [kiwäd siug]」(王名)、「秋子兮 [ts'îög rieg]=秋成 [-zieng]」、「分嵯 [piwón tseg]=夫沙 [piwag sa]」などの例もその証となる。

[t] [t'] [t'] [d'] は 1 音 /t/ とすべきであろう。「仇知 [g'îog tieg]=金池 [kiəm d'ia]」「省大 [seng t'âd]=蘇泰 [sâg tâd]」「実於 [d'iet âg]=鐵冶 [tiët-diäg]」「炭峴 [t'ân-]=沈峴 [d'iem-]」「知六 [tieg liok]=地离 [d'ied g'io]」などの例もその証となる。

[n] [á] は一音韻 /n/ としてよいであろう。

[p] [b'] も一音韻 /p/ とする。

[m] は一音韻 /m/ である。

[dia] [giu] は他に入れにくいし、日本字音ではヤ行に属するので、/j/ とする⁴⁾。ただし、「野」が「阿」に通う例が 2 例あり、不安定な音韻ではなかったと思われる。

こうしてみると、語頭子音として、

/k s t n p m j/

となる。また語頭に立つ母音としては

/a i o u ə/

の 5 種となる。しかしこれは資料の数も少いので、確定的なことはいえない。

⁴⁾ /j/ を子音とみるか、母音の一種とみるかは、母音という概念の問題でもある。私としては、母音の中へ入れてよいのではないかと思っている。拙稿「国語の母音」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』昭和 51 年 12 月)

2. 語 中 音

語中音としては、前項の語中母音と、一語の語中子音とを見なければならない。よってここでは語中字をまず検討して、ついで前項の語中母音とを組み合わせてみよう。

次₃ [ts'ied]=兒₁ [gniæg] 旦₂ [tân] 老₇ [lôg]=禄₁ [lûk] 述₃ [d'iwæt]
 坪₂ [b'iæg] 己₃ [ziæg] 陵₂ [liæg] 手₁ [giwân] 串₁ [kwan] 召₁
 [diæg]=洲₁ [tiög] 也₃ [diäg] (=野) 林₂ [liög] 知₇ [tieg]=智 [tieg]=
 乙₂ [iæt] 奈₃ [nâd]=乃₄ [nêg] 弗₁ [piwât] 阿₃ [â] 悦₁ [jiwât] 買₃
 [meg] 伐₄ [b'iwât]=拔₁ [b'iwât]=麻₁ [mwa] 共₁ [g'iung] 馬₃ [mwäg]
 勿₃ [miwât]=武₁ [miwag] 支₄ [kieg]=兮₇ [ɣieg] 礼₃ [lied] 斯₄ [siæg]=
 自₁ [dzied] 旨₁ [kied]=直₁ [d'ioek] 龍₁ [liung] 沙₁ [sa] 里₁₃ [liæg]
 良₅ [liang] 尸₆ [xiæg] 伊₇ [iæg] 西₂ [siæg] 弥₄ [mier]=湄₁ [mied]
 琴₁ [g'iæg] 平₁ [b'iæg] 羅₂ [lâ] 紀₁ [kieg] 本₁ [pwân] 肖₁ [siæg]
 文₁ [miwân] 大₂ [t'âd]=泰₁ [tâd] 柴₁ [siat] 於₁ [-âg]=冶₁ [diæg] 冬₂
 [tông] 力₁ [liæg] 助₁ [dz'ag] 子₁ [tsiæg] 仍₂ [niæg] 只₉ [kieg]=
 岐₁ [g'ieg] 利₂ [lied] 豆₁ [d'ûg] 夫₃ [piwag] 余₁ [diæg] 比₁ [pied]
 非₁ [piwäd] 六₁ [liæg] =育₁ [g'ioek] 胎₁ [ngied] 音₂ [-æm] 近₁ [g'iæn]
 実₁ [d'iet] 存₁ [dz'wân] 首₁ [xiög] 屈₁ [kiwât] 蜚₁ [tseg]=沙₁ [sa]
 忽₁ [kwât] 骨₁ [kwât] 仇₁ [g'ioeg] 斤₁ [kiæn] 居₁ [kiæg]

語中音も整理して表 II とする。

まず、語中に母音音節の存在することが指摘できるが、これが実際の発音状況を写したものとすれば、その母音の前で音に切れ目があったのではないか、その母音は別の形態素ではなかったかという疑いがあるが。これについては、「難珍阿」の箇所では洪氏の論がある。

/k/ /s/ /t/ /n/ /p/ /m/ /i/ を設けることは前の考察と同じでよいであろう。ただ /ts/ を立てるかどうかは微妙なところであるが、さきに『日本書紀』中の百濟語言の考察をした場合は /ts/ を 1 音として立てた。しかしここでは「蜚 [tseg]=沙 [sa] の例があるので、やはり /s/ の中に含めることにする。また /l/ が出てくることは、いわゆるアルタイ言語の特徴として顕著な事実である。すなわち、語中の子音としては、語頭の子音に比して、/l/ の増加という点だけが異なることになる。

なお、子音に清濁の対立のなかったらしいことは、「召 [diæg]=洲 [tiög]」「斯 [siæg]=自 [dzied]」にみられる。

表 II

â 阿 ₅	ied 伊 ₇	·âg 於 ₁			jet 乙 ₂	giwân 尹 ₁
	ɣieg 兮				iəm 音 ₂	
		kjag 居 ₁			kjæg 紀 ₁	
kwan 串 ₁					kjǝn 斤 ₁	
					kwât 忽 ₁	kjwât 屈 ₁
					骨 ₁	
	kjæg 支 ₄				ziæg 己 ₃	
	只 ₁₀					
	kjied 旨 ₁			g'jung 共 ₁	g'jəm 琴 ₁	
	g'jeg 肢 ₁		g'jok 育 ₁		g'jǝn 近 ₁	
	ngied 〇 ₁		g'jôg 仇 ₁			
sa 沙 ₂	sjeg 斯 ₄			sjæg 肖 ₁		
siat 染 ₁	sjed 西 ₂					
	kjed F ₁		xiog 苜 ₁			
	ts'jed 次 ₃	tseg 蜩 ₁			tsjæg 子 ₁	
	gnjeg 兒 ₃					
	dzjed 自 ₁	dz'ag 助 ₁				dz'wǝn 存 ₁
tân 且 ₂	tjeg 知 ₇		tông 冬 ₂			
	智					
t'âd 大 ₂						
tâd 泰 ₁				tiög 州 ₁		
	â'jed 実 ₁	d'ûg 豆 ₁		djög 召 ₁	d'jæk 直 ₁	d'iwæt 述 ₃
nâd 奈 ₃				næg 乃 ₄		
					hjang 仍 ₂	

pied 比 ₁			piwag 夫 ₃		pwǎn 本 ₁		piwǎd 非 ₁	
							piwǎt 弗 ₁	
b'jǝng 平 ₁			b'iwǎt 伐 ₄					
b'jǝng 坪 ₂			拔 ₁					
mwǎg 馬 ₃	mjer 弥 ₄	meg 買 ₃	mjwag 武 ₁				mjwǎt 勿 ₃	
mwa 麻 ₁	mjed 湄 ₁						mjwǎn 文 ₁	
djǎg 也 ₃			jjwǎt 悦 ₁			djǝg 冶 ₁		
djag 野 ₁ 余 ₃								
la 羅 ₂				ljung 龍 ₁		ljǝng 陵 ₂		
				lǝg 老 ₇				
				lǝk 祿 ₁		ljǝg 里 ₁₃		
				ljǝg 林 ₂		ljǝk 力 ₁		
ljang 良 ₃	lied 利 ₂			ljok 六 ₁				
	礼 ₃							

また有気、無気の対立もなかったごとくで、「大 [t'âd]=泰 [tâd]」「次 [ts'ied]=兒 [gniég]」抜 [b'iwät]=麻 [mwa] の例にもその通用がみられる。

語中母音について考える。

/a/ の類について、子音との結び付きを表 I, II を合すれば下の如くなる。数字は合計用例数。

	k	s	t	n	p	m	l	i
â	6		10	6				
a		8						
ia		2						1
wa						1		
wâ	4				2			
wä					1	4		

k+wâ という結び付きを例外とすれば、後はすべて相補的であるから、/a/ は1音としてよいと思う。/ka/ と /kwa/ とが対立した音韻であったかどうかは未詳である。

[ie] が一母音として立てられることは言うまでもない。音韻としては /i/ とする。

[âg] の音は中国中古音では [uo] となる音であるから、これらを /o/ として一括すれば、

kâg₁₀ sâg₅ dz'ag₂ nâg₁

古・固 所・蘇 助 奴

などは /o/ の音とすることができる。これに介母 [i] の加わった

kia₅ g'ia₁ žiang₂ ŋiat₁ dia₅ liang₅

居 巨 上 熱 也・野 良

などはそれぞれ口蓋化した音として存在していたのではないかと思われる。ただこれらの音を1音として立てるかどうかはさらに検討を要する。

[iwa] [iwä] [iô] [iu] [iö] [û] の群はそれぞれ用例が少ないので、確実なことは言えないが、日本字音で /u/ に発音されるものが多いので、/u/ としておく。

水を意味する「買 [meg] は [mil-muɐ] といわれ、/e/ ではないし、「𪔐 [tseg]=沙 [sa]」という例もあるから、これも /e/ ではない。/e/ という音韻は立てにくい。

/ə/ を中心とする音には、[ə] [jə] [iə] [iuə] [iwə] という音があるが、この分布を見ると次の如くなる。

	k	s	t	n	p	m	l	i
ə			1	5				
wa(wā) (wǎ)	4	1	3		1			
ja	11	1	1	3			16	1
jě	4							
juə	1							
jwǎ	7		1		4	6		

こうしてみると、一番優勢なのは [ja] であって、これに次ぐのが、[jwǎ] と [wǎ] である。そこで上の表を見ると、[l] については [ja] しか付かないし、[m] には [jwǎ] しかつかない。[l] は舌の位置が上顎にあるから、[ja] という前寄りの母音が付き、/m/ は唇音であるから、撮口性の [-w-] が付くのではないか。/p/ もまた /m/ と同じとすれば、これらの母音を二つ乃至三つに分けることは、ここでははっきりした証拠はないごとくである。また、末 [mjwǎd]= 昧 [mwǎd] という例もある。

以上をまとめてみると、母音としては、

/a i u o ə/

ということになるうか。

3. 母音調和

上の母音を見ると、恐らく /ə/ が他の群と別類をなしているのではないかと考えられるが、この予想に対しては、こまった証拠がある。すでに 1 頭音字において見たごとく、

甘 [kām]=威 [rəm]

古 [kâg]=昆 [kwǎn]=巨 [g'iaŋ]

夫 [piwag]=分 [piwǎn]

という例があり、/a/ /u/ と /ə/ とが相通して用いられている。しかし、語の中には、

今勿 [kjam mijwǎt]

屈直 [kijwǎt d'jǎk]

斯紀本 [sieg kjæg pwǎn]

進仍乙 [tsien njæng jǎt]

任存 [njæm dz'wǎn]

などの例もあり、母音調和かと思われぬでもないが、最も基本的な語である

「夫里 [piwag liəg]」なども、母音調和をなしていない。{[-iwa] を /ə/ と同類とすれば話は別になるが）ともかくもう少し精査すべきであろう。

3. 語 末 音

語末音を見ると、次のようになっている。

母 音 終 止 98

n 音終止 10

t 音終止 16

ng 音終止 8

k 音終止 1

母音終止が圧倒的であることは当然予想されたところである。t 音終止についても、

甘勿阿=威悦

居拔=固麻=居伐

今勿=今武

のような、母音終止と相通しているもの、

k 音では 屈旨=屈直 伯伊=壁

n 音では 屎=折文

などの例もみられ、恐らく大部分は母音終止であったものが、表記字のために残っているように見えるのであろう。ただし、『日本書紀』で見たごとく、/-n/は存在したかも知れない。
(馬淵和夫)

文 献 目 録

便宜上、韓人名は日本漢字の読みにより配列する。

鮎貝房之進(1955-6)「借字攷 1.2.3」(『朝鮮学報』7.8.9)

井上秀雄(1961)「三国史記地理志の史料批判」(『朝鮮学報』21.22)

今西春秋(1971)「高句麗の城：溝瀆と忽」(『朝鮮学報』59)

金沢庄三郎(1912)「日鮮古代地名の研究」(『朝鮮総督府月報』、1974『東アジアの古代文化』創刊号に再録)

——(1952)「朝鮮古地名の研究」(『朝鮮学報』3)

姜吉云(1975)「三韓語・新羅語는 土耳其語에 属한다 (三韓語・新羅語はトルコ語に属する)」(『国語国文学』68.69)

——(1977)「百濟語의 系統論 (百濟語の系統論) 1」(『百濟語研究』8)

- 姜信沆(1967)「韓国語学史 上」(『韓国文化史大系』V)
- 姜斗興(1976)「ma 音節表記の吏読について—推古期遺文との関連から—」(『立命館文学』第367.368号)
- (1977a)「『日本書紀』所引のいわゆる「百濟史料」の資料性」(『立命館文学』第379.380.381)
- (1977b)「『三国史記』の地名について—末尾字の考察—」(『立命館文学』第382.383)
- 金亨奎(1947)「三国史記의 地名研究 (三国史記の地名研究)」(『震壇學報』6)
- (1959)「三国史記의 地名考 (三国史記の地名考)」(『震壇學報』16)
- (1969)『増補国語史研究』
- 김선기(1973)「백제 지명속에 있는 고대 음운 변천 (百濟地名中に於ける古代音韻変遷)」(『百濟研究』4)
- 金完鎮(1968)「高句麗語에 있어 서의 t 口蓋化 現象에 대하여 (高句麗語に於ける t 口蓋化現象について)」(『李崇寧博士頌壽記念論叢』)
- (1971)『国語音韻体系의 研究 (国語音韻体系の研究)』
- 金在鵬(1971)「新羅王都攷」(『朝鮮學報』60)
- (1973)「三国史記上代紀年考略」(『朝鮮學報』67)
- 樞相老(1961)『韓國地名沿革考』
- 洪恩俊(1970)「百濟地名考」(『百濟研究』1)
- (1971)「百濟城址研究」(『百濟研究』2)
- 崔範勲(1969)「韓國地名學研究序說」(『国語国文学』42.43)
- 酒井改造(1970)「三国史記の地名考」(『朝鮮學報』54)
- 辛兌鉉(1958)「三国史記地理志의 研究 (三国史記地理志の研究)」(『新興大學論文集』1)
- 全在来(1975)「完全斗 比斯伐論 (完全と比斯伐論)」(『馬韓・百濟文化』1)
- 池憲英(1961)『井邑詞의 研究 (井邑詞の研究)」(『亜細亞研究』4-1)
- (1972)「豆良尹城에 대하여 (豆良尹城について)」(『百濟研究』3)
- (1973)「産長山下 地名考」(『百濟研究』4)
- 趙載勲(1973)「百濟語研究序說」(『百濟文化』6)
- 都守熙(1972)「百濟王稱語小考」(『百濟研究』3)
- (1974)「金馬渚에 대하여 (金馬渚について)」(『百濟研究』5)
- (1975)「所夫里攷」(『語文学』9)
- (1976)『百濟語研究』
- 南廣祐(1960)『古語辭典』
- 藤田亮策(1953)「新羅九州五京攷」(『朝鮮學報』1)
- 文瑋奎(1972)『朝鮮館訳語研究』
- 朴恩用(1972)「百濟建国説話의 吏読文的考察 (百濟建国説話の吏読文的考察)」(『常山李在透還啓記念論文集』)
- 朴炳采(1968)「古代三國의 地名語彙攷 (古代三國の地名語彙攷)」(『白山學報』5)

- (1971)『古代国語의 研究 (古代国語の研究)』
- 前間恭作(1974)『前間恭作著作集』下「三韓古地名考補正(1925)」
- 馬淵和夫(1962)「古代朝鮮語と古代日本語の音韻組織の対比について」(『未定稿』10)
- (1971)「三国史記・三国遺事にあらわれた古代朝鮮の用字法について」(『言語学論叢』11)
- (1973)「三国史記・三国遺事の地名について」(『人間の研究』)
- (1975)「古代日本語と朝鮮語の音韻組織」(『日本古代語と朝鮮語』)
- 三品彰英(1951)「高句麗王都考」(『朝鮮学報』1)
- (1954)「高句麗の五族について」(『朝鮮学報』6)
- 村上四男編(1955-8)「三国史記地理志索引」(『朝鮮学報』8.10.11.12)
- 村山七郎(1962 a)「日本語および高句麗語の數詞」(『国語学』48)
- (1962 b)「高句麗語資料および若干の日本語、高句麗語音韻対応」(『言語研究』42)
- (1963)「高句麗語と朝鮮語との関係に関する考察」(『朝鮮学報』26)
- 俞昌均(1960 a)「古代地名表記의 声母体系 (古代地名表記の声母体系)」(『青丘大学論文集』3)
- (1960 b)「古代地名表記의 母音体系 (古代地名表記の母音体系)」(『語文学』6)
- (1961)「古代地名表記用字의 韻尾에 대하여 (古代地名表記用字の韻尾について)」(『青丘大学論文集』4)
- (1969)「韓国古代漢字音의 研究 其一 (韓国古代漢字音の研究其一)」(『東洋文化』9)
- (1970)「韓国古代漢字音의 研究 其二 (韓国古代漢字音の研究其二)」(『新羅伽倻文化』2)
- (1975)「高句麗人名表記에 나타난 用字法의 檢討 (高句麗人名表記にあらわれた用字法の検討)」(『東洋学』5)
- (1976)「百濟人名表記에 나타난 用字法의 檢討 (百濟人名表記にあらわれた用字法の検討)」(『語文学』33)
- 李基文(1961)『国語史概説』(『韓国語の歴史』藤本幸夫訳 1975)
- (1963 a)“A Genetic View on Japanese”(『朝鮮学報』27)
- (1963 b)「十三世紀中葉의 国語史料 (十三世紀中葉の国語史料)」(『東亜文化』1)
- (1968)「高句麗의 言語와 特徴 (高句麗の言語とその特徴)」(『白山学報』4)
- (1970)「新羅語의 「福」(童)에 대하여 (新羅語の「福」(童)について)」(『国語国文学』49.50)
- (1972 a)『国語音韻史研究』
- (1972 b)「漢字의 積에 관한 研究 (漢字の積に関する研究)」(『東亜文化』11)
- 李娍子(1976)「新羅의 一部軍制가 地名에 미친 影響에 대하여 (新羅の一部軍制が地名に及ぼした影響について)」(『国文学研究』5)
- 李根圭(1976)「忠南地名攷(1)」(『語文論志』2)
- 李崇寧(1945)「新羅時代의 表記法体系에 관한 試論 (新羅時代の表記法体系に関する

る試論)」「(『ソウル大論文集』2)

——(1971)「百濟語研究와 資料面の 問題点 (百濟語研究と資料面の問題点)」(『百濟研究』2)

李郭柱(1965)「全南地方의 地名에 関한 考察 (全南地方の地名に関する考察)」(『国語国文学』29)

——(1968)「韓國地名漢字語의 統計와 分析 (韓國地名漢字語の統計と分析)」(『全南大論文集』14)

——(1971)「지명어의 소재와 그 유형에 관한 비교 연구 (地名の所在とその類型に関する比較研究)」

柳在泳(1971)「全北地方의 伝来地名에 対한 研究 (全北地方の伝来地名に対する研究)」(『圓大論文集』)

劉昌惇(1964)『李朝語辭典』

梁柱東(1942)『朝鮮古歌研究』

——(1962)『国学研究論攷』

(大橋康子)